

第 13 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 11 日（日）午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分

2 場所 東御市文化会館〔サンテラスホール〕 展示室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 將喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（植松主任教育支援主事）

おはようございます。本日はお忙しい中を早朝よりお集まりをいただきまして、ありがとうございます。それでは委員長、よろしくお願いします。

（飯島委員長）

それではただいまから第 13 回の高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。よろしくお願いいたしますと思います。

それでは今日も資料がいくつか出ているようでございます。事務局から説明をお願いいたします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

それでは、よろしくお願いします。資料の説明の前に、他地区の推進委員会の状況につきまして、簡単にご説明をさせていただきたいと思います。

11 月の 27 日に前回こちらの推進委員会がございまして、その後でございますが、11 月 28 日（月曜日）に北信地区第 1 推進委員会で、第 12 回の会議を持ってございます。こちらでは、第 1 区については将来的には 1 校から 2 校になるようにという、段階的に統合する方向が確認されたということでございます。また、中野高校と中野実業高校を統合して、総合学科を設立するということも、再度確認をされたということでございます。

それから、第一推進委員会は昨日、12 月の 10 日でございますが、第 13 回の会議を持ってございます。こちらのほうでは、中条高校、犀峽高校の統合についていろいろとご審議をいただきまして、統合していくことでもいいのではないか、というようなご意見も、いくつか頂いていると、いうことでございます。また、長野南高校、松代高校の統合についても、いろいろご意見をいただいて、統合には疑問だというような声も出ている状況だということでございます。

続きまして、南信地区、第三推進委員会でございますが、12 月の 4 日に、第 12 回の会

議を開いてございます。こちらでは、9 区の高等学校の未来検討委員会で検討された、再編整備候補案について報告があり、飯田長姫高校と飯田工業高校の統合が提案されたということでございます。また、9 区の定時制は昼間部と夜間部、そして統合された高校に設置されることが、提案されたということでございます。それから、箕輪工業の定時制と上伊那農業の定時制も、設置される多部制・単位制高校に統合する方向で確認をされたということでございます。

続きまして、中信地区、第四推進委員会でございますが、同じく 12 月の 4 日に委員会がございまして、第 12 区大北地区の個別論議 3 回目を行ったということでございます。大北地区を 4 校の存続等についてご意見の交換がございまして、学級数等を増やすというご提案もございましたが、これにつきましては、学級数を増やすと 4 校を維持することは難しいため、4 校について再編をしていくという方向が、確認されていることでございます。

以上が、他地区の推進委員会の状況でございました。それから本日の資料は、特にご用意はいたさなかったわけでございますが、要望等を頂いておりますので、委員さんのお手元に、お配りをしてございます。望月高等学校存続と発展を図る実行委員会様から、要望書を推進委員会のほうへ頂きましたので、こちらのほうへご用意をしてお配りをしてございます。それから、長野県高等学校教職員組合佐久支部、上小支部からも推進委員会に要望書を頂いておりまして、こちらについてもお配りをさせていただきました。それから野沢南高校の同窓会からも、会報等頂きましたので、こちらもお配りをさせていただきました。

なお、資料ございませんが、一昨日、野沢南高校の生徒会会長さん副会長さんが、県庁のほうを訪れていただきまして、丸山教育委員長あてに、生徒会の全日制存続につきましてはの要望書を、提出をしていただきました。4 項目からなる要望書でございまして、野沢南高校を現状のまま残してほしい。多部制・単位制の設置については慎重にしてほしい。地域の声を聞いて審議に時間をかけてほしい。これから高校生になる中学生や保護者に説明をして、意見を聞いてほしいというような、このような内容のものを頂いたところでございます。ご報告をさせていただきました。こちらは報告につきましては、以上でございます。

（吉江高校教育課長）

資料等につきましては今申し上げたとおりでございますが、ちょっとお願いということで、若干発言をさせていただきたいと思っております。

本日は委員長さんを始め、各委員の皆さま方におかれましては、本当に日曜日というところ、また年末のこの時期にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また傍聴の方々につきましても、本当に大勢の方お集まりいただきまして、朝早くからありがとうございます。

ただ 1 点、ぜひ傍聴の方々をお願いしたい点がございます。ほかの推進委員会の場合には、非常に静粛にそれぞれ傍聴していただいておりますわけですが、たまたまこちらのほうの、第 2 推進委員会の場合、例えば途中で拍手が起こったりとか、若干なり発言があったりとか、というような状況でございます。このような開かれた形で推進委員会を開催していただいております、各委員の皆さま方はその中でいろいろご意見を、発言いただいております。

ます。その発言に対しまして私どもは、本当に自由な立場でご発言をお願いしたいと思っておりますので、ぜひ静粛に傍聴いただければと思っておりますので、その点だけ冒頭よろしくをお願いしたいと思います。以上でございます。

6 議事

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。それでは、さっそく委員会に入っていきたいと思えます。今日は資料という形では出されておきませんが、要望のいろいろな書面がきておきず。これにつきて、すぐ質疑という形は難しいかと思えますが、要望ですから十分委員の皆さんは中を読んでいただきまして、これからの討議の中に生かしていただくようにお願いをしたいと思えます。そのような方向でこの先進めさせていただきます。

（原 委員）

お願いします。

前回は冒頭に申し上げましたが、対案説明の問題であります。前回は望月高校および野沢南にかかわる、ご説明があつて私どもの理解に大変寄与したように思えますが、そのほかの対案について本日も要請書が出ているようでありすが、この機会をぜひ発表していただけるような、そういう取り扱いを冒頭にまたお願いしたいと思えます。

（飯島委員長）

12月1日付けで、今、原委員がおっしゃった要望書が出ておきず。お手元にコピーがいつているかと思えますが、その件につきてても再度佐藤副委員長とも連絡をとりながら、いかに取り計らったらいいか審議いたしました。その結果、前回は申し上げたように、両提案とも私たちが今まで県教委から説明を受けていた中の問題が非常に多く、そしてその中で今まで私たちも、討議を重ねてきておきず。そして前回、望月、野沢南から提案理由をいただいたことで、かなりその内容がわかる部分が多かったものですから、もしこの先討議の進展上、ぜひこんなところは、今両支部から出ておきず内容について、つつこんで聞きたいというところがあれば、お聞きするような形をとっていききたい、そのように思っております。そういうことでご了解を皆さんにいただければと思っておりますが、いかがでしょうか。

（荻原委員）

私は意見を聞いてもいいのではないかと思っております。

それは先日新聞で見ても、教育長も県議会の中間報告についてどうだと聞かれた時に、案として申し出として認めるという言い方ではないのでしょうか、対案としてやりましたというような話もあったようです。ですから割と地域の合意というのは大変必要という論調が多いように思えますが、そういう中では、やはりいろいろな人の、今いろいろな団体といいますが、そういった意見を聞くことも時間的にはそんなにかららないと思うので、いろいろな意味で地域の声というものを聞いたら私はいいんじゃないかという意見でございますので、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

もう1度私の考えを申し上げますと、野沢南分会から出ている対案ではありますが、これは最後のほうに、紳士的にあえて他校の存続のことをうんぬんと申し上げないで、野沢南をぜひ存続の方向に向けてほしいということを、データの的に、再掲載してるものだと認識しております。

それから佐久支部、上小支部に関しましては、1点丸子実業の総合学科に関しましては、これに対しては一応結論というのでしょうか、方向性までということで同じことであります。それから2番目の対案ではありますが、望月高校に関しましては、今私たちが一生懸命討議しているところで、望月高校からもいろいろな理由の説明をいただいております。もしここで足りなければお願いをしたいというふうに思っております。それからこのあと学校の統廃合に関しましては、もし必要があればお聞きしたい。そんなことでいかがなものかなと思っているわけであります。

ですから、内容を全然聞かない、審議しないという意味じゃなくて、重複しているところはそれでよろしいのではないか、この委員会の中で十分討議ができるのではないかとということでございます。

はい、それではそんなことで進めさせていただきます。

それでは前回の続きというような形になろうかと思いますが、望月高校が多部制・単位制で学校の運営をしてまいりたいということであります。その件につきまして、皆さんのほうから引き続きご意見をいただきたいと思います。

(佐藤副委員長)

前回、私は出身が望月高校で、その中で望月高校が願っている多部制・単位制についての姿勢と言いますか、そういう展開の中で統合という形のものを考えたらいかかというご提案を申し上げたつもりでございます。

私は基本に帰って考えてみますと、今回の高校の改革は、片方を存続させて片方は消滅するというようなそういう論理ではなくて、これから平成31年までの長いスパンの中で、少子化が続いている中で、足腰の強いしっかりした高校をつくっていきましょうという基本的な考え方が一番主流にあるのではないかと思います。そういう中で私たちが今までずっと議論してきた中で、これは県教委のほうで早く実際の高校名をあげてという中で、非常に議論していく中で難しい点があったのですが、ともすれば今議論している中で、実際に名前が挙げられた所にのみに集中した審議がずっと続いてきた。そうすると、当然その話題がふれられたところは、非常に危機感を感じる。こういう中で今非常に難航しているのではないかと思います。

そもそもこの高校改革に関しては、確か推進委員会の2回目ぐらいの会議で申し上げたのですが、これは全校対象の中で考えていきましょう。それで一番いい方法を選びましょうと、こういう話を申し上げたつもりであります。ところが、ずっと今までの中で、ほとんど名前があげられたところをどうするか、こういう話に始終してきたわけです。こういう中で私は、県教委の考え方は先ほど私言いましたように、新しい高校をつくらう、こういう中で出てきた話であるわけですから、もう1回そこへ立ち返ったらいかがでしょうか。

望月と蓼科は統合して、しっかりした学校をつくったらいいじゃないかと、こういう発言したと思うのですが、これは今の話の中では、1 かゼロかの話で、片方が残って片方は消滅してしまう、こういう危機感の中でこの統合の問題が非常にデッドロックにはまっているのではないかと。これは他の地区もそうですよね。統合の問題は必ずそういう問題があります。

統合する場合は、まったくフィフティ・フィフティの状態、新しい学校をつくるんだ、こういう理念に立ってものを考えていけば、誰だってこの少子化の続いている中で、何とかしないと、学校数を今維持できないということは、皆さんご存じだと思います。

ですから県教委にぜひここでお示しいただきたいのは、これから新しい学校をつくるに当たって全面的にバックアップする。県がリーダーシップをとって、軌道に乗るまでしっかりリーダーシップをとり、立ち上げていくということを、しっかり申し上げてもらいたいと思います。

私もこの前は、場合によっては学校名を変えてまで、あるいは場所も変えてもいいぐらいのつもりで新しい学校をつくる、こういう話が県教委からはっきり打ち出されれば、統合する学校に関しては、ならばそれにかけようと、こういう話にこうなるのではないかと思います。新しいものをつくろうよ、こういう話を中心に添えて議論を、進めていっていただければありがたい。こう思います。以上です。

(小林委員)

前回後半で、望月高校だけを話し合おうと、ということでしたが、野沢南の話になりました。今日今委員長さんがおっしゃったように、また芹澤委員さんもおっしゃったように、ひとつずつ片付けていくというふうに今後司会進行をしていただきたいということがまず前提です。

それで前回申し上げましたが、望月高校と蓼科高校、片方がゼロ、片方が1になっているのではなく、両方のいいところを統合して、新たな学校をつくる。1+1 が2 じゃなくて3 以上になるような方向で考えるようなことでなければいけないと思います。望月だけが痛みを感じて、蓼科は何もないということはなしにして。こんな話を申し上げました。

今まで出していただいた資料やそのほか拝見しまして、蓼科と望月は同じ地域性から同じような高校を目指しているなど、これは強く感じます。例えば蓼科ですと、14 年からコースを取り入れて、進学コース、社会教養、福祉それから英語・数学・国語の習熟度に力を入れている。それから中学生の不登校生が20 名ほど入学しがんばっている。4 年生大学の進学率も以前に比べて格段に増加している。クラブ活動もジャズなどを中心に活発に行われている。

一方望月高校も16 年度より進学・福祉・ビジネス・体育コースなど、それぞれ新しい方向を生み出しながら、学校で努力している。蓼科と同じように、習熟度別授業、英語、数学を取りあげている。それから不登校生が約20 パーセントほど今在校している。

こういうようなことで、蓼科・望月同じ方向を目指し、同じように進んでいるのではないかと理解しております。

それで前回頂きました、望月地域教育プラットフォーム、学びの共同体で、町と一体になってボランティア活動もやっている。その中で望月高校とすれば、多部制・単位制がいい

というようなことで名乗り出ておられるわけですが、今私がお話ししたようなことを考えると全日制で十分また新たな方向で出発できるのではないかなと思っています。

多部制・単位制のご希望も、発表の時私は懸念がちょっとございますが、ひとつは1部2部だけで3部ができそうもないということでした。この場合、望月は子供たちの通学範囲が今来ている様子からいって、通学には問題がない、こういうふうにおっしゃっていますが、果たしてそうなのでしょうか。望月が問題ない。前回の時には野沢南がちょっと問題があるというようなことでした。果たしてこの認識の違いはどこからきているのか、かりませんが、望月高校の通学については若干懸念しております。

それからもう1点は、第3部、夜間はちょっとということで、前回ご説明いただいたときに私が質問いたしましたも、その点はというようなことでしたので、私は蓼科・望月統合をうけたことで新たな学校につくるという、そういう方向でいきたいと思います。今隣の佐藤委員も申しましたように、ただ一緒になって今の望月高校に集めてというのではなく、もっともっと教育課程を充実していくような方向で今後議論していきたいと思っています。

（中沢委員）

この望月と蓼科高校の統合ということと、望月高校の多部制・単位制高校への考えというのは、非常に関連が深い。例えば統合になったからには、多部制・単位制というのはこれは当然ほかのところで考えなければいけないだろうし、それから望月高校の多部制・単位制が提案されていることを肯定してくるという場合には、これは統合というのではないということが前提になると思います。

それで私の考えは、望月の教育プラットホーム、これは統合がされたらそのまま蓼科と望月の両方のところにそれが発展できるかどうかということは、私は疑問に思います。というのは、この前もちょっと言いましたが、やはり望月だからこそ、望月の小学校、中学校、高校のひとつがまとまって教育プラットホームということが現実として今売り出しているわけです。そのまま蓼科ともし一緒になったときに、それがうまく進められるのかということについては、継続すら厳しいなという気がします。

ですから、私は望月の教育プラットホームの発想も、教育の学びの共同体という発想も大事に受けとめながら、多部制・単位制高校の中に生かせればいいのかと思います。

しかも現在望月の町においては、望月地域をあげて、これだけやろうという勢いは県下にはないですね。これを大事に受け止めていく必要があるかないかということを思います。

（太田委員）

委員会では、今の時点では、望月高校や野沢南高校を統合、多部制・単位制高校転換をすることで確認をしているわけではないのではないですか。大変申し訳ありませんが、前回休んでしまっていますので、状況が見えないところがありますが、佐藤委員からありましたとおり、全高校が改革の対象であるという認識でスタートしてきているはずです。

まずどのような高校を統合するのか、どのような高校を多部制・単位制高校に置き換えるのか、という議論をしていくことをやっておかないと、名前の挙がった高校だけを対象

として論議をしてしまうことになりかねません。小林委員からもあったように一点、一点確認しながら論議をすすめたいと思います。

私は統廃合をどこにするのか、これをまず論議したいと考えます。事務局案では望月高校があげられていますが、これの背景となるデーターは一応いただいています、これをもって私は望月高校を対象として特定することはできないと考えています。

事務局としては、初めから望月高校ありきで決定したのではなく、望月高校を最終的に特定するまでには、少なくとも5校くらいの対象高校をリストアップされて、その中での比較検討により最終結論をだされたはずであろうと考えるわけであります。

企業でいうなら、投資案件等を検討することと同じであります、この場合3～5案を用意し、各案のメリット、デメリットの比較等により最終結論をだしていくことが常識であります。このような比較検討のプロセスから、必要性が一番高い学校を選定することで納得性がでてくることになるわけであります。事務局は、是非これらの検討プロセスに関する資料を公開いただきたいと思います。

この場合、対象高校といわれている高校以外の高校名がでてくることになります。今は受験期であり、受験をひかえた中学生は不安定な状態にあらうかと思しますので、この論議は非公開でやるべきではないかと考えます。皆さんのご意見をうけたまわりたいと思います。

（飯島委員長）

はい。前回太田委員は前回欠席だったものですから、ちょっと話がかみ合わないようなところがあるような気がするのです。確かに佐藤委員がいましたように全校対象であります、前回は対案という形で、略称にさせていただきますが、望月、野沢南から出たその意見を、私たちはどうするかということで、議論が進んでおります。

ただその延長線上に、先ほど中沢委員が説明をしていただきましたが、望月の多部制・単位制の対案を受け入れるならば、いろんな付随する条件が出てきてしまう。そうすると県教委が示している望月と蓼科の統合がなくなってくるとか、先ほど説明した通りであります。そういうものを頭の中に置きながら、対案を頂いた望月の多部制・単位制のこの提案を私たちはどういうふうに受けとめていくかということの話をしていただきたいということでもあります。

ですから私たちが望月をということではなく、望月から出た対案に対して、どういうふうに私たちは受けとめていこうか、そっくり受けとめていくのか、あるいは難しいと判断する。そうすると難しいという話になると、先ほどその先の話をしていただいたように、佐藤委員それから小林委員のような話になってくる。

整理してひとつずつ片付けていくという言い方はおかしいですが、ひとつずつ解決を導いていきたいのですが、関連があまりにも深いものですから、ついその先の話も提案として出していってしまうということになってしまいかと思います。

前回の芹澤委員もひとつずつ整理していこうという話であります。そういう話になりますと、対案を出していただいた、望月の多部制・単位制のこれも提案通りのような形、又、そこにある程度の条件をも受け入れていくのかという、この辺の議論を、いただきたいを思います。

(原 委員)

やや議事進行にも関わるのですが、ひとつずつ整理をしていくという、そういう方向はその通りであります。流れからいきますと、多部制・単位制という新しいタイプの学校をひとつやっていこうじゃないかということが、おおよそその方向として確認をされてきました。そして前回2つの学校から対案の説明があり、そしてそのほかの委員会で議論されてきたことを振り返ってみますと、望月は手を挙げて自らを転換する。それから野沢南は本校ではなくて、交通の至便なところへ、こういうご意見ありましたし、それからこの中で2、3の委員の方から、「いや上田の駅前あたりどうだ」というものも出てきました。

こういう話が出ていたと思うのです。乱暴な言い方で整理して恐縮ですが、つまり多部単位制を1校入れるという方向性がある、その中で今言った意見が出されているわけです。ですから、その事をもう少し議論する。つまり対案をめぐり、それから位置の問題を議論することだと思うのです。

なるほど高校総数、高校の数どうするんだと、いう問題と極めて密接にからんでいるのですが、あえてそこを切り離していかないと、それと同時に議論をするというのは、大変難しいだろうと思うのです。そんなところを運営上はご配慮いただきたいと思います。

その事にかかわって、今日望月から資料の提出がありました。私が前回最終的に会議終わるところで求めたことに対しての、回答と受けとめさせていただきますが、多部・単位制の学校というのは、前々から申し上げているように、一般的には単位制のみの運営になっている。これにはそれぞれさまざま問題点、課題、隘路がある。そのことに関わってホームルームを軸にもっていききたいという、こういうのが前回対案の説明の中にありまして、そのことをさらに具体化した、ご回答が寄せられているわけであります。

つまり単位制のみの運営に、いわばプラス学級制、場合によっては学年制というものが加味されている。このことが大変重要な定義だと、もう1度私は確認をさせてもらいたいと思うのです。何度も申し上げてきましたように、高校の運営は単位制と学年制というのがある、ともすると学年制のみ運営になりますし、今日の全日制等、ほとんどはそういう学校になってきている。本来は併用が望ましいということが初期のころは盛んに言われたわけですが、そうってしまった。一方でこの識別においては、それで言ってみればアクションでは、ありませんけれども単位制のみの運営、こういうふうになっているわけですが、やはり単位制のみではなく学年制プラスを加味するという、そういう考え方が、いわば新制高校原点の考え方が、その2つなんだというふうに受けとめたいと思うわけがあります。これがひとつです。

それからプラットホームについては先ほど中沢委員からお話ありましたので、私はそれ以上のことを申し上げませんが、ひとつだけそういう一連の取り組みの中で、先般はどこかの資料に書いてありましたが、教育臨床の本当に権威である、東京大学の佐藤学さんが先日入られて、佐藤先生は高校に入られるケースは、ほとんどないと伺っていたのですが、その後佐藤さんがこの北佐久の小さな学校に足を運ばれて、授業指導される、研究指導される、そういう挑戦的な取り組みをしているところもまた注目をしておきたいと思います。

最後に、いずれにしてもそういう形で自らの学校を転換し、という本当に思い切ったご提案があるのですが、こういう学校自らが、自らの構想で変えていくという、ここの部分をやはり、うんと評価する必要があるのではないのでしょうか。私たちは本当にこのことを

強く申し上げたいのですが、Aという学校を名指しして、お宅はこうなったらどうだと、Bという学校はどうだと、一般論としては言えても深入りした議論と、いうのはなかなかできないわけです。佐藤委員さんがおっしゃったように、すべての学校が対象なのですが、限界があるのです。そうした折に自らを形を変える、中身を変える。そういうご提案にやはり敬意を表したいと思うわけです。以上です。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。太田委員いいですか。

（太田委員）

望月高校さんが代替案をだしてきているきっかけは、たたき台とはいいますが、事務局案により、再編の対象となるという認識があったからと判断いたします。しかしそのたたき台そのものについて、われわれは認知しているわけではありません。この委員会で望月高校を存続させるという結論を出したらどうなるのでしょうか。その場合でも多部制・単位制高校への転換を主張されるのでしょうか。

ですから、まずわれわれ委員会が基本的なところを確認してからでないと、提案を受けるのか、受けないか、その内容がどうなのか等を論議できないと思います。順番が逆ではないでしょうか。

（飯島委員長）

はい、太田委員から、運営に関してのお話が出ましたが、この点に関してはいかがでしょうか。

（西村委員）

流れは、委員長の考えてられる方向性で、私はよろしいかと思っています。ただ、今日沢山の方がいろいろな意見を出されました。今も5人、6人の方がおっしゃいましたけども、それぞれがボンボンボン出ているだけであって、まとめがつかなくなっているのです。冒頭佐藤委員がおっしゃった部分に関しては、私は非常に理由があっておっしゃっていると思いますので、それに関して、例えば県がどう思ったか。やっぱりひとつひとつやっていかないと、言いつばなしで終わってしまいます。従って一度これは区切って、今出た意見についてまとめたほうがいいのではないのでしょうか。

（飯島委員長）

はい、それでは関連という形でそれぞれの委員の皆さんのお話を聞いておりましたが、佐藤委員もう一度整理して、県教委の質問事項を整理してお願いします。

（佐藤副委員長）

西村委員のお話、そのとおりでございます。私が舌たらずだったのですが、実は私は今日最後に県教委の考え方といいますか、それを最後に質問として聞きたかったわけです。どういうことを聞きたかったかというと、多部制・単位制、それから総合学科、これに関

しては全面的に軌道になるまでしっかり県主導でつくっていくと。そこまでしっかりお答えいただきたいなと思うて実は発言したわけです。

実は私も工科短大をつくるときに 3 年間設置検討委員会という委員会をつくりまして、企業の方、大学の先生など 12 人ぐらい入っていただいて 3 年間、新しい学校を軌道に乗せるまでやりました。そしてスタートしました。こういうことですので、今回いずれにしても多部制・単位制、それから総合学科これに関しての県の考え方、それをぜひ今日お聞かせいただければありがたい。今よその地区でも全部転換した所はそういう転換状態になっている所は、全部難航していますよね。これが一気に解決する可能性だってあるわけです。

つまり自分の学校はなくなるのではない、いい学校になるんだ、こういう発想の中でそういうものが確保できれば、一気に解決することできると思うのです。考え方としては、全員が今のまま高校がなり行かないということは皆さん承知しているはずです。そういう中でしっかりそういう意思表示をしていただければ、これから議論もしやすいのではないかなと、こう思います。ですから、県のほうのお話を話ができる範囲でしていただきたいと思います。

（飯島委員長）

はい、次長さんも課長さんもお見えです。ひとつ、県教委のそれぞれの転換した総合学科、多部制・単位制に対する高校のてこ入れの意思をお聞かせいただきたいということがあります。

（吉江高校教育課長）

ただいま佐藤委員さんからご発言頂戴いたしました。この関係につきまして申し述べたいと思いますが、まず第 1 議的に前々から申し上げていることの繰り返しになりますが、私どもは再編整備とかあるいは統合という言葉は使っておりますが、統廃合という言葉は使っておりません。その趣旨につきましては先ほど佐藤委員さんからご発言頂戴いたしましたように、それぞれの学校のいいところを取り入れた形での学校を新たにつくっていきたいという前提で考えています。それを考えた場合にたまたま結果として校舎校地を当然ながら有効に活用したいということの中でいずれかの校地を使いたいというスタンスに立っておりますので、これが大前提であると。これは別に第 2 通学区のこのご当地に限らず、全県的に同じような考えを持っているということはまず申し述べたいと思っております。

そしてそうした場合に、当然ながら今後再編整備対象校になるところ、これは総合学科高校、あるいは多部制・単位制高校も含めてなのですが、私どもとしては第 1 議的には非常に力を入れて、今お話ございましたが、スタートする限りでは県教育委員会がそれぞれ重点的にしっかり軌道に乗るまでのフォローはしていきたいというのはこれは第 1 前提でございます。

例えばの話が今の夜間定時制というところは、一般的には教頭を含めて 9 名ぐらいの体制で実際は運営されています。ただしかしながら多部制・単位制というと、今の申し上げた数字よりも多い教員の配置をして運営をしていくというようなことになっております。それをすることによりまして、当然ながら昼間も 2 部に分かれ、さらに夜間も分かれていろいろな教科を設定する中で、当然ながら講師の数、今申し上げたのは常勤の先生の数で

ございますが、必要に応じては非常勤の講師というものも必要になってくると思いますし、さらには私どもは生涯学習ということも考えておりますので、そういうような分も含めて力を入れて設置してまいりたいと考えております。

また総合学科高校につきましても同様でございますが、いずれにしましても私どもは基本的に前々から申しあげておりますように、全国的に総合学科高校の設置、あるいは多部制・単位制の設置というような状況の動き、さらには今の生徒さんの状況、そのようなものを考えた場合に、こういうようないろいろなタイプの学校を設置しさらにそれについては正直申し上げて、可能な限り私どもとしてできる人的、あるいは金銭的にもある程度かかる面があると思っておりますが、そういうようなことについてはぜひ前向きにやってまいりたいと考えています。

またその中で、もう1点述べさせていただきますと、多部制・単位制高校につきまして、どうしてもちょっと今話題が出ておりますので申し上げますと、いわゆる区分しますと全日制と夜間なので、どうしても夜間定時制のイメージを持たれつつ、若干イメージ的にはというのがあるかと思いますが、しかしながら私どもは昼間定時を入れることによりまして、実際問題としては全日制と夜間部との間の位置づけのものであると考えています。その辺のご主旨も了解された上で、ある意味よその通学区においては、当初だいが反対されていた地域でございましたが、むしろ積極的に多部制・単位制を採り入れようということと動き始めている地域もあるということを申し述べたいと思います。以上です。

(飯島委員長)

佐藤委員よろしいでしょうか。

(佐藤副委員長)

私のお願いしているのは、それも非常に大切なのですが、私は今、例えばうちの学校は廃校になるのではないかなというような学校に関して非常に危機感があるのは、まったく消滅してしまうという考え方があると思うのです。そうではなくて新しい学校をつくる一番基本のところ、これは関係する学校つまりスタートするまでの基本計画のところでは両者が参加する、あるいは3校が一緒になるのだったら3者が参加してそれをつくる。そして自分たちの、今まで伝統あるそれぞれの学校の伝統が、そのまま引き継がれていくと、この考え方そこが一番大切ではないかと思うのです。そこが結局対象になっている、廃校になるのではないかなと思っている学校の危機感だと思うのです。そうではなくて、一緒につくるという、その段階で参加できないかと、こういうことを申しあげております。その先の話は吉江さん今おっしゃった通りでございます。そうしていただきたいと思うのですが、そのスタートするまでのところで、それぞれの学校の伝統がそのまま引き継がれていくという、そここのところの考え方が浸透することができれば、非常に理解が進むのではないのでしょうか。

終わるのではない、新しくつくるんだ、そこをしっかりと県指導でやっていただかないとだめだと私は思うのです。そういうことです。

(飯島委員長)

佐藤委員からそういうご質問があって、県がバックアップしていくという答えが出たわけであります。その中で、さてどうしてもこの望月の多部制・単位制の申し出をも含めた統合的な話が出てきてしまいますが、望月からの提案をどうするのか、現状の提案通りの形のもので受け入れていくのか、そのへんのところ、もう少しご意見ください。

(和泉委員)

今の司会の主旨と違っていると思うのです。佐藤先生の件だと県の話の中で、ひとつだけわれわれがひとつの目標に向かってやっているのですが、私自身教育行政のあり方などについて、どこかに過去のレビューがなく、それが今回の中で反映していくということが、ちょっと見えてないと思っているのです。

例えば今、佐藤先生が言われた、やっぱり伝統だとか。私はまさに最初の会議から言っていますが、学校経営の透明性と、地域とインフラが入っていくことをやってないとだめです。私達が今回どこにどういう案で決めようと、少子化は刻一刻と進んでいくと思うのです。だから例えば学校経営をする経営目標の指標を明確に先につくっておいて、「こうなったときにはこうなるよ」と。あるいはそれに対して努力をどう評価するかということまで、まさに今まで放置されているのです。

それに対して今プラットフォームという考え方が出てきて、地域という考え方が出てきて、私達は明らかに何年後にはそういう経営資料をオープンにして、ある次元では公開してある次元では秘密にやっても構わないが、そのように理解されていくプロセスが非常にない。

その中で今どこにしますかという言葉は簡単に言いますが、それはやっぱり歴史を見てない人がいますから、誇りもあるし情熱もあるし、郷土愛もあるし、自分の住んだ町というのはあると思う。そういう中で、どういうコンセプトの指標をもつのか。

私は例えば基本的には学校経営だと透明性、だから努力だと思う。その学校をつくっていく、どういう経営をしていくか。私は「経営」という言葉にしています。あと将来実施してきたことがどう評価につながっていくか、自分たちがどう満足しているか。ある面では今問題になっている今度は効率ですよね。税金の効率、先生の効率、人が出て行く効率、そういうところをつなぎ合わせるというしるしを絶対持っておかないと、こういう場面はまた何年後に、同じようなことをやると思うので、これはぜひ、それは5年でいくか10年できるか、あるいは人数がもうこうなったときには「1人学級いくらにする」と。それがインフラの元なんだという、もうこういう形をやる。私はそれに向かって地域やら学校が、あるいはわれわれも含めて努力して、それをどうするんだと。

もともと先ほど南高と望月の前回のときに話を聞いたのは、この地域見ましても名前が挙がっている所だけが当事者意識なのです。今まだ最初の時点のトリガーが引かれるまではどこに何があるということの基準は明確に。私はこの委員会の中では、ある程度オーソライズされていき、結果的にそうなるかもしれないし、ならないかもしれない。だから私は心の中では、ひとつは多部制・単位制を導入するかということについては賛成なのです。このようなインフラは今後、今の状況では理解していかないということには納得していますから。この地域につくるということについては納得しています。ただどこにするかとなったときに、今まで説明してきたように最初からやはり発想の所で南高ありきみたいな所

はどうしても、だから私先ほど最初の太田さん言われたときに、それは討議の対象になってもいいのですが、なぜ南高になってきたか、判断した項目は何なのか。

だから私ももしばりがかかっているわけですよ。インフラは過去のものを使うというから、上田のど真ん中につくりたいってやりたいと思っても、過去のインフラを利用するという予算も持っていないから、どうしてもこじんまりとした案から逸脱しない。

そういう部分をやはり県教委はどこかである程度の基準をしないと、現状の中で選べと言われたらあるものしか選べない。だけどそれが本当に将来にとっていいかどうかということについては、判断の基準は今もらっていませんからできない。

そういう意味合いで、もう1回多部制・単位制は私は賛成だけれども、どこにするかということについての基準というか、考え方、だけどそれが抜けがないか、教科が足りているかどうかということだけは、どこか皆さんはわかってらっしゃるかもしれませんが、私はまだ十分、なぜ南校なのか。それに対して望月が手を挙げているということについて、どう判断するかということがひとつと、それから先ほどほかの学校が自分たちは当事者じゃないということをおもわれているといいましたが、前回この話をしたときは、ひょっとしたら危機感を持っている所がある高校が、それとは関係なく意思表示したかもしれなく私はその時にあとから来るともめるとことを予測していたのです。先に読んで手を打って、そして私たちはこうしたい学校をつくりたいということがまさに活性化だと思っていたので、だからそのチャンスはオープンにしないと失礼になると思ったから、公募した方がいいのではないかとということでした。

ところが出てきたところが望月高校さんということだったのです。それは意見を聞くに値するというような考え方での、もう1回学校の必要性抜きには、避けて通れないようです。夢科と望月の問題というのはあるのですが、ではその選択肢は今の普通高校だとただ夜間があるかどうかだけの話で、入れたときこれまでの投資とどういうリスクがあるのかというのは討議していないような気がするのです。以上です。

（太田委員）

私が先ほど申し上げた部分を、今、和泉委員からもご発言いただきました。われわれは、再編対象高校をどうして野沢南高校、望月高校にするのか、きちんと説明できなくてはなりません。皆さん説明ができますか？各メンバーの皆さんは納得しているのでしょうか、この説明文では納得できない方も多いのではないですか？

高校生数の減少に応じ、高校数を削減させていくことは避けることはできません。しかし対象となる高校の立場に立てば、納得のいく理由付けがない限り、当委員会や県政に対する不信感だけが残ることになりかねません。先に私が申し上げたように、5校程度の候補高校のできる限りのデーターをそろえ、比較検討論議をすべきです。いいかげんなプロセスで結論を出すことは許されない、許せないと思っています。委員長、整理をいただきたい。

（飯島委員長）

結論を出すということではありません。

(太田委員)

結論を出すのではなくて、5 校ぐらいを選んでいただいて、ですからこれは非公開で論議したい。

(飯島委員長)

もし 5 校選ぶのでしたら、委員の皆さんから出していただきたいです。

(太田委員)

いや、これはデータ持っているのは県の教育委員会のほうで沢山のデータを持っているので、できる限りのデータ出していただいて、それで論議したいと思っております。

(飯島委員長)

データといいますと、今まで出たものの他に何が必要なのでしょうか。

はい、どうぞ、吉江課長。

(吉江高校教育課長)

いろいろご議論いただいておりますが、第 6 回に私どもがお出した資料がありますね、1、2 枚の資料ではないと思います。その資料が基本です。それでその時に、いろいろそれについて今ご発言いただいたような発言はなかったと思います。

さらに申し上げますと、もうひとつこの会合をさかんに太田委員さん非公開でとおっしゃっておりますが、どういう運営をされるかそれをまず決めていただきませんか、私どもはそれと同時に、「いろいろあったのではないか」というお話がございますが、私どもが告示できるものとすれば、今までお示した限りでございます。

それ以外のデータとして持ち合わせているとすれば、皆さまに前回もお配りしている学校要覧、あれはいろいろ細かいのが一切入っていますから、それに基づいているデータをお出しすることはできますが、私どもが再編整理候補案ということで決めたものは何かといえば、この案だけだということを申し上げるしか、これは方法ございません。

ですからそれを持って、あるいはほかのデータで、例えばの話がもう本当に委員の皆さまにお配りしてございます資料を私どもが集計するというような形になりますが、そのデータを含めて何らかの形で議論されるということであれば、その議論の方法をお決めいただいたほうがいいと思います。

またさらに申し上げますと、私どものほうではそれぞれのこの地区、例えば以前もご説明申し上げた経過がございますが、現状において第 6 通学区はピーク時に比べますとこれから先でもクラス数が 10 クラス減るわけです。それで第 5 通学区は 46 が 36 ということで同じく 10 クラス減るわけです。この減ったことを今お話承っておりますと、そのままでするということであれば、ぜひその辺を。初めからそれはいいと思わないということでのこの会自体が運営されておると私は認識しておりますので、その辺も含めてぜひ論議いただきたい。

(和泉委員)

今のお話ですが、要するに県案として、南高という名前が出ましたが、最初の出発のときにはまだ決まっていませんということでしたよね。だからどういう項目で基準に見て、どこでこれがポイントになって南高校にしましたよということを、その説明をやっぱりしてもらいたい。そういう目方の資料の見かたですね。

だから要するに何にプライオリティーをつけられたのか、インフラかなというのはわかりましたが、ではインフラは普通高校のところに、今普通高校だけのところに例えば持っていったらどういうマイナス面があるのか、われわれは計算できないですよ。学校の先生が1人1教科だったら何人いなきゃいけないとかね。そういうことがわからないですよ。

要するに投資とマイナスとプラス面ということがもうちょっとわかるような、資料は提出しましたということ言われていますが、極端な言い方すると、そういう言い方だとわれわれが読み込む力がないと言われればそうかもしれない。しかし委員会にやっぱり判断に足りる資料出すというのは、事務局の当然の仕事だと思う。一番聞きたいのは、南高をなぜ絞り込んだのかというときに考えた項目とプライオリティーとお金と人と効率ということについて、もう1回説明していただければと思っています。現時点では判断できない状態なのです。そこを言っているのです。

(吉江高校教育課長)

以前もお話いたしましたように、旧第6通学区におきましては、基本的には私どもは南の地域、いわゆる南佐久、南佐久郡までエリアに考えた場合に、野沢南高校というのはまずは定時制が今現在あるというのが1点でございます。それとさらには南佐久北佐久を全体的に網羅して動くということになりますと、当然ながらある程度の今の小海線沿線とか、その辺である程度中心的地域のほうがよろしかろうというのが2点目なのです。

それからさらに申し上げますと、校舎自体はこれから仮に多部制を設置するということになりますと、午前・午後・夜間で場合によりまして2つのクラスが必要とところがあるとすると、極論を言いますと4クラス。かける4とすると16クラス必要になります。そういうような規模も考えた場合に、ある程度普通学科、普通教室の多かったという点も含め、またこれについてもいろいろご批判もありますが、反面遠からず近からずということも考えれば、必ずしも交通の便が私どもとすれば悪いとは思っておりませんので、その辺も含めた場合にこの地が適当と考えた次第です。

(太田委員)

そうしますと、新たな発想で、新たなお金を投資して、新たな学校づくりをするということは基本的にはなさらないということですね。

既存の学校をあくまでベースにして、なるべくお金をかけないで、魅力ある高校づくりをする、そういう基本姿勢は、これは確認してよろしゅうございますか。

(吉江高校教育課長)

よろしいでしょうか。

(飯島委員長)

はい、どうぞ。

(吉江高校教育課長)

校舎校地を今のものを使うということと、教科自体のカリキュラム自体を変えるということは全く別なことだと考えています。ですから、今現在のものは先ほどちょっとお話が出ておりますように、学年進行です。いわゆる学年制です。それに対しまして、多部制は単位制ということですし、そういう意味では確かに既存の校舎校地を使うということにつきましては、否定はいたしません。

否定はいたしません、そこで運営される教育内容というのは大きく転換すると。そういう意味では新たなものをつくるということにご理解いただきたいと思います。

(太田委員)

われわれが見学してきました、多部制・単位制高校は外国人や改めて勉強したいという高齢者を積極的に受け入れていました。私は、多部制・単位制高校はこれからの時代に沿った、新しい発想による「誰でも、いつでも」というようなコンセプトの、いうならコンビニエンスストア方式の学校かと考えているわけであります。

そうしますと、このような学校に一番必要なのは、交通の利便性ではないかと考えます。高齢者や女性の方に、駅から何キロという長距離の夜の暗い道を通学させることはできません。場所の設定を安易に考えてはいけないと思います。そう考えた場合、野沢南高校がこれに適合するのでしょうか？踏み込んで論議をしていきたいと思います。

(和泉委員)

すみません、もう1点いいですか。

吉江さんの先ほどの説明の中で、選択したことについての経過は言われました。しかし前回も発言していますが、高校に行って見てきましたが、南高校の拡張性というものについては非常に厳しいと思っています。今までの討議のことで、先ほど佐藤さんに至っては要するに環境整備をやり、投資をしますということで、今例えば多部制等入れてきたときに、駐車場のスペースも見ましたが、今でも本当に並び方も何もできてないような状態で、それでも一応整備されて、努力されていますよ。しかしそういう所にこの話を持っていったときに、どれだけの投資をして、どういう議論になっているのかまだ聞いていませんね。

要するに「選んだ」ということと、投資とマイナスということの比較がまだ説明されていない。私は自分で目で見てきていますから。手前というか奥というかこっちが行きどまり。それで野球部はある。スポーツある。いろんなことが以前に話を聞いたら、ちょっと通ってはいけないんですけども、あまりに狭くて放課後か何かで事故が起きたと。そういう話を聞いているのです。

だからそういうことについて危惧することと、投資とそういう案が、もうちょっとそれは地元を選ぶひとつのPRにもなるし、賛成していただくひとつのものの考え方じゃないかと思うのですが、今選んできた話をされました。これがもうどういうことについて危惧

していることと、その辺については何らかの説明があれば聞きたいと思っています。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。やや私たち委員会への検討依頼事項のところへまた戻ってきたような気がするんです。私たちは検討依頼事項をきっちり明示されてこの委員会の招集を受けております。それをもう一度頭の中に入れておいていただきたいと思います。

（芹澤委員）

時々行ったりきたりしていますが、具体的に南高まで絞るというのは、まだその段階までいかないのではないかと思います。まず基本的に多部制・単位制については、採用しようということでこの委員は同意を得たと。その時にではどうするかという時に、たまたま望月高校さんから多部制・単位制でという提案があったんでしょう。その提案をどうするかということで、この前まで議論してきたわけですね。ですからまずそのへんをよく整理して、もう1度提案に対してどうするかという部分は考えていかなければいけない。その提案を議論する過程で、佐藤委員さんあるいは中沢委員さんから、蓼科との関係をどうするんだという問題提起がなされたのです。そういう形で進んできているわけで、いきなりすぐ南高まで行ってまた行きつ戻りつになってしまうと思うのです。

それからもう1点、教育委員会で5校か6校具体的にどうかという点については、実は1校ですら提案すること自身問題だと、そういう議論で進んでいったわけです。その中で5校や6校、仮に秘密会であれ、やっても教育委員会としては本当に出せないと思います。1校出したこと自身が、私自身はやはり具体的に出したこと自身、時期尚早ではなかったかと思えます。それはやはり委員会任すべきではなかったかと基本的に思っていますが、ただ具体的にもう現実出た以上、それもまた議論の対象になるのではないかと思います。

それで元の議論が何かまた行ったり来たりしているので、もう一度、望月高校の多部制の提案についてどう考え、それとの関連で佐藤委員さんあるいは、中沢委員さんの言われた蓼科高校との関係を議論していくと、だんだん詰まっていくのではないかと思いますので、委員長よろしくお願いします。

（飯島委員長）

提案をいただいたからそれに対して「どうだ」ということであります。ひとつ今芹澤委員が説明をしていただいたようにお考えいただきたい。

あくまでも県のたたき台が出たから望月高校は手を挙げて対案を、出てきたことは事実であります。けれども、そのへんは真摯（しんし）に受けとめなければいけないと、思いますが、たたき台が出てしまったことを今ここでいろいろいっていてもしょうがないことでもあります。尚、結論を急ぐことではありませんけれども、議論を前向きに検討していたければありがたいと思います。お願いします。

(中沢委員)

多部制・単位制高校はこの第2通学区に1校置くんだという方向性は確認されていて、県教委の候補案として野沢南高校があがっています。かたや、望月高校からは私どもがという立候補をされていますが、先ほど太田委員さんあるいは佐藤委員さんがおっしゃった、その挙げた学校だけを、うんぬんということも大事なのですが、端から17校の中で果たして多部制・単位制高校を置くなれば、ここは可能性があるかないかどうか、基本に戻って、一応候補に挙げた所だけではなくて、南は小海高校からずっと上田のはずれの例えば上田高校のあたりまで、あるいは東側の軽井沢高校のほうまで。この学校は多部制・単位制高校にしたらどうなるかという、そういうこともやはり原点に戻って、1校ずつ考えていく、そういうことも必要ではないでしょうか。

その中でやはりここがいろいろな条件でいいたろうということが、ひとつとは限らないかもしれません。出てきて、そして絞っていくというのも、必要なとは思いますがどうでしょう。

(飯島委員長)

はい。この提案はいかがでしょう。

(荻原委員)

そういった格好でやって来なかったわけですが、私は皆さんのお話いろいろな外部の意見を聞いても、やはりどうも将来の姿が見えないと不安が皆さんがあるということで、多部制・単位制はちょっとという部分があると思うのです。それと関連すれば、例えば上田と上田千曲の定時制は坂城が多部制・単位制になったときにはこちらにくっつけるという格好で第1通学区では今度は屋代南というような話が出ていますので、それとの関連もやはり選ぶということを考えると、出てきてしまうのではないかなと思うのです。第1通学区で坂城がもう少し長野のほういけば、上田と上田千曲の定時制に通っているかたはどこへいくんだらうなということで、その関係もやはりもう少し推移を見ないといけないのではないかなと思います。

望月に関しましては、本当に生き残りということをかけて、地域一体で多部制・単位制を選択したと、立候補したということは、大変な存続の危機意識というのがあって、それなりの活動も一生懸命やってらっしゃるわけです。

かたや野沢南高校については、ほかの高校あがることできませんので、それは白紙撤回という形にならざるを得ないという部分は、もう理解しなければならないと思うんです。

だから多部制・単位制に関しては、第一通学区の方向をやはり見極める必要があるのではないかなということを言っておきたいのですが、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

1通の多部制・単位制校につきましては、私たちが口をはさむところではありませんが、この動向によっては上田と千曲の定時制のことは1校は残すべきと付帯決議で入れていかなければいけないと私は思っております。

ただ付帯決議で入れるということで、ここではそれ以上のことは言えない状態であるか

らと思っております。

そのへんのところを含めながら、中沢委員から出た1校ずつ、どちらかと言うとつぶしていくと言うのでしょうか。多部制・単位制を1校、この2通に設けるならば、ひとつずつ検討を加えてというお話がありました。この点につきましては、私たちが先ほど検討依頼事項をもう1回見直してほしいというお話をしましたが、その中で全部にかかわってくるのですが、最終的にはこの2通では17校あるうち15校にして、1校を多部制・単位制に転換する。あくまでも学校を減らすということはひとつの検討事項の中に入っているということを頭に入れておかなければいけないということでもあります。

その上に多部制・単位制を設けるならば、減らそうとする学校をひとつ転換して増やしていくんだと。ですから、実質多部制・単位制私たちのこの2通では受け入れられる形になりましたから、実質1減でいけるのだという、そのへんのところも頭の隅にやはりおいといて議論に入っていけないと、いけないのではないのでしょうか。

ただ最終的に、これは先ほど、後でご説明をひょっとしたら伺いたいという佐久支部、上小支部の組合の中には、万が一、望月高校に多部制・単位制を置いたときは、それぞれの高校を残すべしというふうに書いてあります。そのへんのところをもう一度提案を見ていただければ、それでいいのか。

当然今のように蓼科高校がそのまま残る。ほかの地域のほうも全部残すように提案されております。その時に、これはあくまでも私の仮定の話で聞いていただければと思いますけれども、丸子実業が総合学科に、蓼科高校には武石、長和そちらのほうから大勢の学生が来ている。そして、望月が多部制・単位制になった時に、そこへ子供たちが集まった時に、蓼科高校は実際に子供たちが減っていく中で、存続がどんなになっていくのか。そういうことも頭の隅に入れながら、やはり考えていかなければいけないんだらうなと思っております。

明らかに、31年までは子供たちは確実に減っていくわけです。もう実際生まれてこの世に誕生した子供たちが高校へあがるわけですから。この数は動かないわけであります。そういうことを十分頭に入れながら、より魅力ある学校、そして適正規模、そのへんのところを含めながら、前の話に戻ってしまいましたけれども、やはりそれは頭の中に入れながら、いや丸子は総合学科がいいだろう。この地区にはひとつは多部制・単位制を設けようよ、ただどこに設置しようということで非常に問題になってきております。

そしてたたき台として野沢南というのがありますから、和泉委員が提案していただいたように、もし万が一ほかに手を挙げるところが、あってはいけないからということで公募をした。望月が出てきた。じゃあ望月の意見をじっくり聞いて、その意見を取り入れるなら取り入れる。取り入れたらどうなるのか、という議論であります。

そのへんのところからもう一度望月をどうするんだという話をしているわけであります。別に望月に固執しているわけではなく。もしほかに中沢委員がおっしゃったように、ひとつずつ考えてというのなら、それもいいと思います。ただ先ほど吉江課長が言いましたように、学校要覧の中に子供たちの大体の通学エリアが出ておりますから、そういう子供たちの今住んでいる所を見ていくと、たたき台と言っても、県のたたき台ではないのかな、やっぱりこれは真摯（しんし）に受けとめて私たちは議論をしていくことかなと思います。

ただ野沢南となったのは、やはりどうなのか。私もわかりません。ただ佐久平自体が実際に人口が、子供たちの数が減ってきていることは事実であります。だから、それをどういうふうにしていくのか。全部残して受け入れていくのか。いや、どこかを統廃合して、いや新たな展開で野沢南と野北を一緒にするのか、いやそうじゃなくて北農といっしょにするのか、臼田をいっしょにするのか。いろいろあると思いますが、そのへんのところも含めながら、佐久には5校あるんですね。長聖も入れますと、6校あります。人口が上田よりも小さいところに6校あるんです。

そのへんのところも含めながら、それぞれの学校が魅力ある学校で維持していくためにはどうあるべきなのか、基本のところに戻りますけれども、そんなことを含めながら、結論を急ぐわけじゃありません、どうぞご意見ください。

（太田委員）

この委員会での論議は、今年の12月いっぱいというようなことを最初にお聞きしたと記憶があります。これについてはいかがですか？時間がもう余りありませんが、十分な論議を経ないで結論をだすことは無責任であります。結論の出ないことも結論のうちであるというように考え、われわれが十分な理解と納得ができたもののみ回答すればいいのではないかと思います。そういう意味で日程をあらかじめお聞きしたいのですが。

（飯島委員長）

どうでしょうか。日程の件先に話をしてもよろしいですか。これは県教委のほうで新聞紙上で出ておりますし。どうぞ事務局のほうから答弁をお願いします。

（吉江高校教育課長）

5月の29日に私が資料で説明したものというのは、議事録で出ておりますので、またご覧いただきたいと思いますが、出しました資料の中で12月のところはかっこして12月と書いてあるのです。これは資料ご覧いただければわかりになります。それで12月をお願いしたいと申し上げつつ、1月に入るのもやむを得ないと考えております。できるだけ早くというような話を申し上げている中で、私どもといたしましては、1月の上・中旬ぐらいを目途にお願いしたいということを、かねてより各委員会にはお願いしている次第でございます。

（太田委員）

わかりました。そうしますと（土）（日）曜日開催したとしても、何回もできるわけはありませんね。改革という名にふさわしい改革案を提示しなくてはならないとなると、優先順位をつけて集中して論議しなくてはならない、そうすると高校の統合問題に関して一番先に論議が必要かと思えます。

誤解されて困るのですが、私は前にも申し上げましたが、財政危機といわれる中で、われわれの世代が飽食を食んで、次の時代に粥を食べていただくようなことは決してしてはならない、今、高校数の削減はどうしてもやらなくてはならない、そういう思いは変えていません。

ですから、余計、これを理解して、受け入れていただけるような納得のいく、大義名分が明確となる企画案が必要であると言いたいのです。

前にも申し上げましたが、具体高校名をだすことにさしさわりのあるなら、A校、B校、C校・・・でもいいですから、何校案かを用意し、比較検討し、消去法でもいいですから対象高校の特定作業をおこなうことが必要であります。こういう経過を経て、例えば望月高校さんに白羽の矢が行ったとしても、この内容、経過をよくご説明すれば、たたき台での「総合的判断」による結論より、受け入れていただける可能性は高まるのではないのでしょうか。初めから望月高校ありきで組み立てられた、たたき台案での理由説明では説得はできません。

本来これは事務局からの基本データをもとに私自身、もしくは委員会で整理しなくてはならない仕事かもしれません。しかし、企業では経営企画部門が当然お膳立てしており、この部門の職務でありますので、私としては、これは事務局の職務であるという思いが強いわけであります。

まず、このような整理をしていただかなくては納得のいく結論付けにはならないと思います。

（原 委員）

太田委員さんの気持ちはわかるのですが、前回ご欠席されていて、前回の多部制・単位制についての説明とかその議論という経過がけっこう大事だと思うのです。それでつまり、さっきも申し上げたのですが、多部制・単位制問題をもう1度しっかりと議論するのか、それから学校の総数問題。これがすなわち統廃合問題になるわけですが、どうするのかということとしてのひとつですね。それを私前から申し上げているように、前回の経過からすれば、多部制問題をもう少し深めるべきだということだと思うのです。

おそらく間もなく休憩になると思いますので、申し上げておきますが、中沢委員さんから名前が挙がった高校以外にもひとつひとつという話がありましたが、これはちょっと事実上難しい。そういう意見があれば、私はこう思うと委員から発題をすればいいわけですね。それに基づいてその討議を用意するべきと思うのです。

それから、これは具体的なそういうお話がなかったかと思うので、ひとつ触れたいと思うのですが、望月の対案、自らを多部に転換するというのは、過日伝わったところによると、6月24日の名前があがった、公表されてから練った構想ではない。それ以前からというふうに伺いました。そういうようなことをちょっとつけ加えさせていただいて、多部についての議論を休憩後にお話したいと思います。

（西村委員）

ちょっといいですか。

いろんな意見が出ておりますが、芹澤委員がおまとめになった形で進んでいけば、おおのではないですか。望月高校がどうだとか、野沢南がどうだとかという以前にどうしてこうなったかというのが議論に出てくるのです。そういうことを全体で、答申の中でどこでやるべきかと、いう議論出てきますので、そうすると今までおっしゃっていた太田さんのいろんな不安等は私は払拭（ふっしょく）されると思っています。

それで、一番大事なことは、資料はあるのです。なぜ野沢南高校かというのは、第3回、第7回で出ているのです。ということは何でわれわれこういった議論をしているかということ、大変事務局には失礼ですが、まさしく説明不足なんです。だからプレゼンテーションをするには「こういう点でこうだ」という吉江課長おっしゃいましたけども、もうちょっと具体的におっしゃらないと、わからないですよ。もう少し再考してほしいと思います。

それから各学校につきまして、耳の痛い話がございました。名前の拳がっていない高校は何となくノウ天気じゃないかと言う話ございましたが、これも第2回か第3回のときに、各学校がどうやって魅力ある学校をつくろうとしているのかというのは、各学校が出した資料がすべてあります。それに基づいて今学校はまさしく動いているんです。そしてもし野沢南高校が多部制・単位制になるのであれば、近くの学校は変わらざるを得ないのです。その議論をしています。

それから私は小諸高校ですが、小諸高校もどうするか、議論をしています。なかなかこれは表には出て来ませんけれども、それだけは申し添えたいと思っております。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。休憩のお話も出ました。まさしく1時間半たちました。ここで10分ほど休憩を入れたいと思います。お願いします。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

はい、それでは休憩前に引き続きまして、会議を再開いたします。

それでは前半だいたい前に戻りながら、多部制・単位制について議論をしていただきました。特に前回までの流れからいくと、やはり芹澤委員それから最後は西村委員がまとめたいただきましたように、今出ている望月さんが、あえて自分たちがしたいという対案、これについて私たちはどうするのか、ということは真摯に受け止めて、議論を重ねる必要がある。受け入れるなら受け入れる、その辺のところを、議論を重ねたいと思います。

難しいならば、いわゆる野沢南という意味ではなくて、他のどこがいいんだと、いう形で進んでいくのが、順番だろうと思っております。その辺のところ、もう1度ご意見をそれぞれから、いただければと思います。

(太田委員)

先ほど原委員から、望月高校多部制・単位制案は、望月高校の統合案が出される前から研究されてきたものであるということですので、内容をご説明いただくのが良いと思いますが。

(飯島委員長)

前回聞いたわけであります。

(太田委員)

お聞きしたのですか。

(飯島委員)

はい。

(太田委員)

わかりました、それではこれについて、委員長はどうしていこうというお考えなのか。

(飯島委員長)

ですから、今言いましたように、それを取り入れた多部制・単位制の運営を、受け入れるかどうかという、それを聞いているわけです。

(太田委員)

多部制・単位制高校についてはそれぞれ学習してきていますので、大体の姿は理解できています。しかし、望月高校案を受け入れるかどうかについては、前にも何回も申し上げましたように、委員会で多部制・単位制高校をどうしていくかの結論が出ていない段階では、踏み込んだ論議はできません。それとも望月高校の多部制・単位制案はよく研究されており、優れている案と評価できますので、このような方法論を取り入れるかどうか論議するのでしょうか。

(飯島委員長)

いえ、太田委員前回出てないからという、大変失礼になってしまいますが、ちょっと、議論がかみ合わないですね。

(太田委員)

申し訳ないです。どうしたらいいんですか。

(飯島委員長)

ですから、望月が、自分たちの望月高校が統合の形じゃなくて、たたき台と出た、統合でなくて、私たちは多部制・単位制の高校に転換して運営をしていきたい、という対案が出たわけです。ですからそれに対して。

(太田委員)

これを導入するかどうかを論議するのでしょうか。

（飯島委員長）

ですから、それを私たちとすれば受け入れるのか受け入れないのか、受け入れられないなら、どういうところで受け入れられないのか。受け入れるなら受け入れる形をどうするのかという、そういう判断です。

それがおかしいですか。決しておかしくないですよ。

（太田委員）

ただ、私は、多部制・単位制方式については、まず、順番としては事務局案を論議することがスタートではないかと思っていましたので、お聞きしたかったわけです。

（飯島委員長）

ええ、事務局からの検討事項を私たちは討議するんですよ。それが基本です。でもその中に多部制・単位制の設置について議論してほしい。と。そしてそれについては、2通では受け入れようというふうに、合意ができたわけです。

そして事務局のたたき台は、野沢南という形が出ていたけれども、他に対案が出たら、出してくださいよ、私たちの討論の参考にしますからという形で、対案を募集したわけです。対案が出て来たわけですから、前回その対案についてご説明をいただいたわけです。ですから私たちとすれば、その対案を受け入れるような形で、これから進めていくのか、いや、そうでないという形で、違う方向に行くのかということを、議論して欲しいって言っているわけです。

ですから、あくまでもそのまま全てを、うのみにするというんじゃなくて、受け入れながら、新たな展開をしていこうかということです。決して会議の進め方としてはおかしいとは思っておりませんし、返って望月高校の対案を尊重して、議論をこれから進めようとしているわけですから。

（太田委員）

そうしますと、事務局案と望月高校案を比較検討し、どちらが良いかということまで論議することになるのでしょうか。

（飯島委員長）

ですから野沢南のことは、また後で考えますから、頭の裏では当然野沢南のことがあったり、それからほかにお考えがあるならば、さきほど5校、6校とっておりますから、ほかにお考えがあるならば、それを頭の中に入れながら、望月でどうだろうかと、受け入れるのか、入れないのかというご判断を、下さいといっているわけですから。

（太田委員）

はい、わかりました。

(西村委員)

次のようなことが絡んでくるのです。これは前回も議論されたんですが、望月高校が提案された、多部制・単位制を議論していくと、県教委から出されてきました、望月高校と蓼科高校を統合するという意見と絡んでくる。切り離すことができないです。それで先ほどこから、佐藤委員や中沢委員からのご意見が出たような形、つながりになっております。で、そういう流れに、今委員長はご説明になったと思いますが、私はこのように理解しております。

それから県教委は、平成 31 年まで高校入学者を計算していますが、32 年を考えると、ある新聞の報告ですけれども、長野県全体で 500 人減るそうです。そうすると 14 学級が 32 年になると減らざるを得ない。そういった資料もその新聞には出ております。

そういうことも、われわれは、考えながら議論すべきだと思います。それぞれの学校が、私の高校も含めて違います。全ての学校に歴史があります。でもわれわれが考えるのは、これから来る中学生、小学生、幼稚園生。彼らはどんな学校に行くべきかという、ロングプランで考えなきゃいけないんです。5 年後、10 年後、いや 20 年後どんな学校にするのか。そう考えたときに、望月高校の提案を考えてみました。

私が特に引っかかっているのは、多部制・単位制を考える上で、やっぱり利便性というのが、1 番重要なポイントになって来るんじゃないかなあ、と思っています。社会のいろいろな方々が来ていただく学校をつくっていく上では、やっぱり利便性を第 1 に考えていくべきではないのかなあ、と思います。

プラス思考やマイナスイメージとか、いろいろなこといわれます。つまりセイフティーネットを考え、それからもうひとつは、新しい学校づくりの中でこういう学校にしていって、前向きなんて大変失礼な言い方ですが、そういう考えでやっていくという姿勢の学校は、総合学科的ではないかなあと思っています。

その面からすると、私は、なかなか厳しい判断ですけれども、優先順位からすると望月高校は、なかなか難しいかなあとは思うんです。佐藤委員もおっしゃったように、蓼科、望月で新しい学校をつくる。ふたつで統合して新しい学校をつくる。それぞれが今素晴らしい伝統を持っています。といういろんなメリットと持っています。それをどうやってからプラスアルファするのか。まさしく県教委も、バックアップするといってくれました。そのように自然にやっていけば私はいいと思います。

ただし県教委は県庁にありますが、私は前回でもいいいましたけど、やはりそれぞれ 4 つの地区で、東信なら東信地区で、この改革プランをチェックする機関が必要だと思います。チェックをしていって、どうなんだろう、もっとここはやるべきじゃないとか、チェック機関が、必要じゃないかなあとは思います。以上です。

(市川委員)

お願いします。

私、前回、発言させていただいた内容と、ちょっと繰り返す部分が出て来てしまうかと思いますが、原委員と意見の共通な点もあります。で、原委員と共通な点と言えば、前回申し上げた通りですが。利便性と同じ資料を、県立高校の配置図、県教委から配られたのを、冊子いただいております。そのほかに、県立高校再編整備候補案について資料 1 とい

う、これに詳しく望月高校、蓼科高校、野沢南の関係で、どのような経過でこういう改革案になったかということについての、詳しい資料を見させていただきまして申し上げるという点と、私が持っている全ての経験、まあ中学の現場で子どもたちがどういう意識でいるか、そして私の経験から、こういう職業柄ですから、すべての第2通学区、小海高校から始まりまして、全部、実は歩いて通った経験もあります。歩いたといいますが、伺わせていただいたこともあります。中の様子も、経験の中では知っているつもりでございます。

その中で申し上げたい点ですが、まず、望月高校の提案に沿いまして、私本会の指示に沿う点で、非常にありがたいなと思っておりますが、ただ2部制の、まあこれは交通の利便性がある点につきまして、3部制の夜間につきましては、やはり生徒が通う点について、厳しいものがあるろうと。そういう点について懸念を、望月高校では、要するに子どもたちが、どういうふうを選ぶかなあという点については、懸念するんです。

しかしながら、小海線沿線の高校が、小海から岩村田、小諸まで、全部流れているわけですが、その中で見ていただく中で、この中から多部制・単位制になったならば、しかも3部制で、もう当然3部制で行われたならば、これ多部制では全日制を吸収するものです。

従って、これはしかも生徒との10名、最大で15人でした。少なくともところで太田ですけれども、先生1人に対して生徒10人の、そうしますと10人から15人という非常に小規模校、これは全体ではありません。授業の運営が非常に小規模です。

従って先ほど県教委からありました人的支援というのは、その点だと思います。体験支援を受けるわけです。中身は、トータルに変わってくるわけですが、そうしますとこれは全日制の生徒、通学になって子どもたちは、やはり、こんなに少ない生徒数なのか。しかも違う先生、別だからたくさんの見ていただいて、しかも群馬県の太田フレッズですが、外部講師90名近くを紹介しておりました。そういうこともありまして、たくさんの先生方に少人数で見ていただける。これは大きなメリットで、しかも単位制一人ひとりの学びのカルテに合わせて見ていただける、これは大きなメリットですから、小海線沿線、交通の利便性のあるところには、おそらく多くの応募者があるんでは、ないかと思われます。

他の町上の高校と違った大きな変換の違い。しかし県教委の中では人的配慮には、サポートはされるんですけれども、本当は、これはほかの静岡中央にせよ、フレッズにせよ目に見える形で、インフラを行うものかな、そういう意味では資金的な支援、目に見える形で校舎が変わる、ホールが出来る、カフェテリアが出来るとか、非常な資金面でのサポートがあるわけです。目に見えて中身が変わったことが印象付けるというんですが、恐らくまあそこまで長野県はまだできる、県教委のほうではそういう提案はされてないですけど、そういう魅力を出て、目に、中身だけで、目に見えないインフラの活力なんですね。これは生徒は来年は、応募にできるようになるんじゃないかなというふうに、私は想像されるわけです。

そうしますと本来の意味が達成できるのか、今定時制の子どもたちは、夜間部しかありませんけれども、昼間部で、学びたい子はたくさんいるわけです。しかしながらそういうサポートがなかったために、全日制と定時制の2つの間で、なんとなくこう過ごしてしまう。やむを得ず過ごしてしまう。そういう子どもたちが多いんじゃないかなと思うわけがありますけれども。そういった子どもたちが社会に巣立つサポート体制というのが、本来

の意味を方向この便利のいいところに置かれたならば、達成できないのではないか。

そうしますと望月のような、本来は夜間ではなくて、昼間でも生活したい子どももいるわけですので、そうしますとやはり利便性よりも、本来の目的でそこに来たいと、いう子どもたちをサポートしてもらえる。あえてちょっと遠いけれどもバスに乗って行こう、そしてそこでひとりずつ面倒を見てもらおうと、少人数クラスで面倒を見てもらおう。そういうような学校が実現したほうが、むしろいいのではないかなと私は考えております。原委員の意見非常に周りのご意見と共通する点もあって、そのふたつやはり、望月の件は非常にいいご提案をいただいているのではないかなと、私は考えております。以上です。

（飯島委員長）

望月の提案がいいということは、望月に多部制・単位制を設置したほうがいいだろうというご意見ですか。それともその内容を、生かしながらというご意見ですか。その辺のところは、どうでしょう。

（市川委員）

内容を生かしながら、十分に検討していけるんじゃないかと思います。

（飯島委員長）

はい、わかりました。

（太田委員）

ちょっと素朴な質問をさせていただきます。今、市川委員から多部制・単位制高校は望月高校方式に賛成というご意見が出されておりますが、もし、これが当委員会での審議の結果総意として賛成であるということになり、その後の統合対象高校の論議でも望月高校しかないというような結果になったらどうするのでしょうか。各種データから判断すれば、事務局の望月高校統合案には妥当性があり、このような可能性もなくはありません。

ですから私は繰り返して申し上げたいのですが、最初に統合対象高校をどこに置くかという論議をすべきではないかと考えざるを得ないのです。

（飯島委員長）

どうして順番が逆ですか。

（太田委員）

そういうことがあり得るってこともあるのではないですか。それでもよろしいですか。

（飯島委員長）

ですからそれは、ここで多部制・単位制を、望月を残すというようならば、これで進んでいけばいいじゃないですか。

(太田委員)

では統合するという具体的な議論に入った場合はどうなるのですか。

(飯島委員長)

当然消えるわけですね。

(太田委員)

望月高校を除いてやっていい、そういうことですか。

(飯島委員長)

当然です。

(太田委員)

それで、よろしいですか。

(飯島委員長)

当然消えますね。そうするとどこかで統合していかなきゃいけない。

(太田委員)

そういうことで、よろしいんですね。

しかし、そうなると事務局案のその経過と違ってきますよね。それはいかがなんですか。そういうこともありうるのでしょうか。

(飯島委員長)

それは事務局に聞く必要はないですね。ここの委員会で...

(太田委員)

事務局は、ご意見だけです。そういう提案いただいているんで。特にそれは、問題はないわけですね。

(飯島委員長)

事務局お願いします。

(吉江高校教育課長)

かねてより申し上げておりますように、再編整備候補案としてお出ししたものの自体が、変わる可能性はあると。それぞれの推進委員会におきまして、今お話ございましたが、議論された上で内容が変わるということは、あり得るという前提でお願いします。そんなことはご理解いただきたいと思っております。

ただ私どもにいたしますと、それぞれの推進委員会が、基本的に私どものほうでご提案した、数字的なものにつきましては、ご理解いただいた上で、基本的に動いておりますの

で、その点はぜひ配慮いただきたいと思います。

（太田委員）

あの、数字的なものとは、どういうことですか。

（吉江高校教育課長）

具体的に、それぞれの地区に1校ずつ例えばつくるとか、あるいは統合の学校をつくるとかですね。どれぐらいのイメージを持って私どもがいるとか。そういうことについては配慮いただきながら、運営していただきますので、その点をご理解いただきたいと思います。

（太田委員）

そうしますと、坂城の問題でどうなんですか。これも私欠席してしまして、よくわかりませんが、そういうことの絡みになりますね。そうすると、そういう全体数の問題です。で…。

（吉江高校教育課長）

坂城高校を、多部制・単位制にしたいという案が、第一推進委員会に私ども、これはお出ししました。それでそれに対して第一推進委員会のほうでは、違う学校名が今出ております。それでその違う学校名が出ることによりまして、こちらのほうの地域に、場合によりますと、今設置している夜間定時制をどうするか、というような議論は出る可能性はあるかと思っています。

ただ、たまたま違う学校を提案された方の、提案書の趣旨にあったのですが、提案いただいた学校というのは、実は駅からは近い学校なんです。それで私どもの原案は駅からは遠い、若干、比べた場合遠い。それでしなの鉄道の沿線のスタンスで、例えば上田から、上田方面からお通いいただいた場合に、しなの鉄道の乗っていただく距離は増えるものの結果的に、その後歩いていただく距離との相殺を考えると、恐らくは、しなの鉄道を使った場合で考えれば、あまり変わらないところなんだな、という認識をしているということは、ご理解いただきたいと思います。

（太田委員）

そうすると、いつごろ結論は出るんでしょうかね。それはどうしたらいいんでしょうか、われわれは、その結論を待ちながらやるのか。

（飯島委員長）

それは必要ないと思います。

（太田委員）

ないですか。

(飯島委員長)

ここで私たちが、もし万が一、向こうへ移動したときには、今課長が説明した以上に長野寄りのと

ころに、いく可能性もあるわけですよ。そのときには、上田に定時制を残したらどうか、という付帯決議を付ければいいことであって、よその議論に私たちは影響される必要はないということでご理解ください。

それでは、進めさせていただきます。

(中沢委員)

いいですか。ちょっと基本的なことで、確認をしたいのですが、全日制の17校から15校にする。それから望月高校と蓼科高校を統合する。これは県教委の、高校再編整備候補案なんですね。「候補案」であって、これが「ねばならない」というものではないと受け留めています。もっとさかのぼって言えば、この高校改革プラン検討委員会最終報告の中にも、県全体の高校の数が、76校が目安となる。目安なんです。従って絶対に76校にしないということではない。

それを受けて第2通学区でも、私はこういう解釈なんです。17校から15校は案であって、従って、どうしてもここで2校を減らさなくちゃならないという方向じゃなくて、本当に、この地元の声や、この地区の検討委員会で検討した結果、いや、17校じゃなくて16校でも十分それが必要性があるんじゃないかと、いう報告が出れば、それはそれで私は、この委員会の結論として、出してもいいんじゃないかなと、いうことを思っていますが。

(西村委員)

今の中沢委員の意見は、私もそう思います。逆に17校を14校にすべきだと、そういうような議論も、出てくる可能性だってあると思います。それはこの委員会でそういうことで、私は別に構わないと思っています。まして私自身が思っているのは、さっきいいましたように、32年でまた500人減るんです。

(荻原委員)

確認です。

今下の15校から下の論議がありますが、それについては、先ほど吉江課長がこれは絶対なんだ、という私はニュアンスで受け取っています。そういうことないですよ。

17を15校に削減するのは、数としてはそういう格好で私は提案したと、これはある程度学区という意味では、上限枠でこれプラス1ということはあるんですが、要は1校減らししていることは、県教委の条件だと私は受け取っていた、その前提について、非常に乱暴な5.5プラスという意味で、15プラス1になったかどうか、根拠は定かではありませんけれども、県教委の意向として、先ほどそんなちょっと、ニュアンスを感じたものですから確かめて、私だけは認めるものではありませんが、確かめておきたい。

(飯島委員長)

はい。これはだいたい前にも、県教委の答えが出ておりますが、もう一度お願いいたします。数の件です。

(吉江高校教育課長)

先ほど申し上げましたように、ベースとすれば、私どもは 17 に対しまして今のお話通り 15 校で、多部制・単位制を 1 設置ということで、それぞれの地域に基本的にはそのベースでお願いしたいというのは、これはベースです。といいますのは、それぞれの委員会におきましても、これはお願いしてございまして、いろいろなご議論がある中で、今お話ありましたが、場合によってさらに、というような意見もあろうかと思えます。

ただしかしながら、この地区とりわけ学校数も含めて、ある程度の規模を、恐らく今後考えていかないと、先ほどもありました、たまたま西村委員さんからお話にありましたある情報によりますと、500 人減って、さらにこの 6 区の落ち込みが、大きいというような内容の記載が、あったということまで、申し添えたいと思います。

(和泉委員)

いいですか。

私自身としては、17 を 15 についての考え方、ニュアンスとしてはね、幅を持たせるようなニュアンスでは当局からありましたが、私個人的には、やはりこの問題を将来的にあまり残すことはない、と思っていますので 15 という数字には、何らかの形でまとめてあげたほうがいいと思います。

それは日程がという問題は別にして、やっぱりこれはひとつ、それは私自身、第 1 から他の委員会の話も聞いていますが、こういうトリガーをはっきりしないと、無くなってしまふとしちゃうと、やっぱり根本が崩れちゃう恐れがあるんで、われわれはこういう使命を得た以上、ただやっぱり明らかに異常だってこととか、なんとなんていうのは別にしまして、審議の中では私はやっぱり 15 ということについて、非常につらいですけども、真摯に受け止めて、そういう中で討議していきたいと思っています。

(飯島委員長)

はい。統計上、そのような形になっているということから、はじき出したものだと思います。どこを減らすということは、大変難しい問題であります。今、和泉委員からの提案がありましたし、県教委からの検討依頼事項の中にも、明確に書かれておりますから、その方向で進んでいきたい。そういうように思っております。

(原 委員)

どこで議論がこうおかしくなるのか。つまり多部制の議論をしようとする、また総数の問題が出てくる。それで 17 か 15 だとなるわけです。

やはり議論を戻して欲しいのですが、そこまで出ているんだったら、一言、言いますが、32 年から 500 減るとかね、そこまでね、何故そこまで議論するのでしょうか。そういうことでいくと、これからは来年、再来年とずっと、学級数の推移で見れば、10 年 11 年後ま

では微減なんですよ。

今、この年末に、この12月にさらにもう1回委員会やって、あるいは1月に委員会やって、そんなに慌てて、議論をして、31年に合わせようとしていたんでしょう。うんと無理じゃないですかね。10年11年後までは微減であるとするならば、もっとそのところは緩やかに考えたほうが、いいってことだけでも、本当、申し上げたい。

それから、多部制問題に戻りたいです。で、幾つかのことでひとつは、先ほどの吉江課長のご発言にも、質問をしたようなのですが、それから先にいきますが、今まで県の案で、多部制の学校規模について、明確に実はなかなか示されてこなかったと思います。で、私の調べた県議会の答弁では、1、1、1というような答弁が、あったような記憶があります。しかし先ほど、ちょっと私、はっきり今メモが取れなかったもんですから、2クラスとおっしゃったんですか。2、2、2というようにおっしゃったんですか。学校規模がね、1と2では大違いですね。ここは、はっきりさせていただきたい。

それから、2つ目は、その第1通との問題が、先ほどでも委員長さんが、まとめてくださったとおりでと思うんです。ただ案自体が、その第1通が、どこにいくかということによって変わってくるとするならば、それは案自体が非常に粗雑なんですね。「1通に従属する」というという格好になってしまうわけですから。そういうことで議論は、なかなかどこか頭の隅に置いてやるということではないと思います。

それから、もう1点は、その案の中のもうひとつ、その定時制の統合問題。やっぱり私統廃合だと思いますね。この文面を再編高校案を見ても、例えば統合して「の校舎を、利用する」となっているわけですから。考え方として理念として引き継ぐことはあるにしても、「A高校はなくなり、B高校はなくなる」のです。そこは言葉をリアルにとらえたほうがいいと思いますね。

その場合に、定時制問題が、非常に乱暴な取り扱いを受けている。ずいぶん私は前からいってきましたから、これについては同じことを申し上げませんが、その定時制の統廃合とやっぱり切り離してもらわなきゃならない。多部制・単位制というのは、なるほどそういう要求があるでしょう。そしてそれは恐らく小規模になるのではないかな。ここまではだいたいそういうニュアンスで、この委員会の中でも理解が進んでいたように思うんですけど、その際に定時制の統廃合は切り離している。そのことをもう1度申し上げておきたいと思います。

望月の多部制については、評価は、先ほど申し上げましたから割愛します。

(飯島委員長)

定時制を切り離してというところは、ちょっと委員の中で分かれてきているかと思いますが。やはり、定時制も含めた多部制・単位制を設けたほうがいいというご意見と、今、原委員から、そのようなご意見がありました。またもうひとつ、1通のことは、わきに置いて、頭の隅でいいと思っております。

それから利便性については、これまた出すとおかしくなってしまうんですが、望月の対案の中には、上田まで網羅した地図が載っております。ですから望月高校とすれば、上田までもお考えで、多部制・単位制を提案をしてきているということでございます。

それからもう1点、野沢南高校は、別に野沢南と言う意味じゃなくて、佐久地区ではな

く、もっと利便性のいい、しなの鉄道沿いという提案がございました。この辺のところをどうとらえていくのか。望月の提案を主として考えていくのか。その辺のところを考えながらひとつご意見をいただきたいと思います。今、2点、お話ししました。定時制のことと、それから利便性のことです。

実際、望月高校まで佐久の端から、どの位時間を要するか実際にはちょっとわからないもので、この同心円で書かれたものの地図だけで、私は判断していて、大変失礼ですが、その辺のところをお考えいただきたいと思います。

もし、望月に午前の部、午後の部だけで設けた。そして頭の隅で当然考えていただきたいのは、ここへ多部制・単位制高校を1校設けますと蓼科高校との統合は、なくなるということです。そうしますと佐久地方、上田も含めた中で、1校どこか統合しなければいけない。その可能性が大だということです。

しかも先ほど私いいました。佐久地方は、佐久市に5校ございます。それは北佐久農業、望月と、臼田という職業高校もありますが、5校です。プラス私学がございます。6校あります。あの地域に6校ある。そして上田のほうは、3校プラス千曲も入れて4校です。その辺のところも含めながら頭の中で、さて、もし望月に置いたときには、そういうことも考えていただいて、望月という判断をしていかきゃいけないんだらうなあと、そんなふうに客観的に思います。

それからもうひとつ、先ほども繰り返してですけれども、学校要覧の中に長和町、それから今はまだ丸子町ですが、丸子町のところからたくさん蓼科高校に通っているお子さんがいらっしゃいます。それが総合学科が丸子実業にできることによって、そのお子さんたちが同じように山を越えて、蓼科のほうに来ていただく、魅力ある学校づくりをするには、蓼科高校を統合しないでひとつ残しておくことでいいのか。それは純粋な私の疑問であります。そんなことを含めながらご意見をいただきたい。

その前に事務局から学校規模のことについて、お願いします。

(吉江高校教育課長)

先ほど私が申し上げましたが、基本的には昼間を2部、それから夜間を1部ということになりますと、最低で3部ですから3クラスは必要だと。それで4年間だとしますと、 $3 \times 4 = 12$ 学級というのは基本のベースです。

ただしかしながら、昼間の午前部なり午後部を、2クラスというような要望が出る可能性は、非常に高いと思っております。それでそうした場合は結果的に、1学年が4クラスになりますので、 $4 \times 4 = 16$ で、16クラスが必要なようなイメージを持っているということで、先ほどお答えした次第です。

(飯島委員長)

それでは、ご意見をお願いします。

(宮阪委員)

すみません、お願いします。

多部制・単位制の望月について、お願いしたいと思いますが、この設置につきましては、視察に行かれた各委員さんの、お話を聞きました中では、将来的には必要なのかなあと感じます。しかしこの第2通でそもそも需要があるのか、また通いにすごく大変じゃないのか、今は設置の緊急性があるのかということを考えますと、今でも私自身は疑問に感じています。

多部制の位置付けにつきましては、進学対応型にしていくという前向きなお話も出しましたが、たたき台として出されました、「定時制高校の再編整備にあたって」の基本的な考え方を読みますと、高校改革プラン検討委員会からの最終報告書に基づき、「学びの場」と「居場所」に配慮した多部制・単位制の独立校をとあります。通学区内の定時制高校の中心校としての充実を、図っていくとなっております。この基本的な考え方が、多部制・単位制の高校が、進学対応型というような考え方のものではないと思えます。が、進学対応型の設置も視野に入れるのが、よいかなとは思いますが。

第2通学区の場合は地理的に、どこの場所に設置したとしても、山を越え、谷を渡りということで、通学していく必要があります。多部制・単位制高校については、設置の方向ということに委員長さんが、話をまとめていただきましたが、もし、今回設置ということになりますと、多くの委員さんからも指摘がありましたように、通学の利便性というのが、最も重要視されてくる必要があるかなと思えます。それには比較的、就学人口があって、小海線、しなの鉄道線沿いであることが自然的に、候補地になってこようかなと思えます。

対案として出されました、望月高校の多部制・単位制の説明がありましたが、説明を参考にしながらも、最重要視すべき利便性を、考慮すべきであると思えます。望月高校へは鉄道がありません。バスで通学するために、多部制という特殊な通学時間に配慮した、バスの運行が見込めるのでしょうか。自動車通学は、親が送迎するということを考えますと、勤め人では困難と考えます。バイク通学になりますと、交通事故その他の弊害が心配されます。自転車はもっと困難だと思います。どの方法を取っても通学には大変困難かなというふうに思われます。

高校生の多くは、鉄道を使った場合、駅から学校まで自転車で通うというのが多いと思いますが、野沢南高校は、鉄道駅から遠いという話でしたけれども、自転車で何分ぐらいかかるのかなあと、教えていただければと思います。

候補案に上げられたのは、現在定時制が設置されていることが、要素にあるかとは思いますが。野沢南がどうも通学困難であり、地元関係者の理解も得られないままの状況では、多部制の設置には、まだまだ議論が必要ではないかと、私は思いました。他の利便性の良い高校を候補と考えると、または第2では多部制の導入については、もうちょっと検討して慎重に審議していくと、他に方法も考えられないでしょうか。と思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。特に宮阪委員は、ちょうど山を越えた丸子ですから、非常にその辺のところ地域の方のことを考えると、通うには難しい。多部制・単位制という魅力ある学校が出来ても、通うのに大変だということの思いも込めて、お話をしていただきました。

(小林委員)

私は最初、多部制・単位制がよくわからず、マイナスイメージがあったと申し上げてきましたが、群馬県太田フレックス高校など見学しまして、不登校の子ども、あるいは朝から1日、いすに座って勉強出来ないような子どもがいる現実、そういうような子どもたちにいい居場所になるな、あるいは心の安らぎになる学校をつくっていくことは、大変前向きに考えており、第2通学区へ設置する方向について、賛成しております。

それで、2,3 わからないことや、伺いたいことがあります。市川委員、原委員から望月高校についてお話いただきました。先ほど委員長のから、「望月高校のことですからそのお考えですか」ということで市川委員へ尋ね、回答として「望月高校の理念に賛成だ」というようなお答えでした。ということは、望月高校そのものじゃなくて、その考え方がすばらしいと受け取っているかどうかということです。

それから、それより先に、学年制を加味した望月の提案すばらしいと、いうご発言がございましたが、これは望月の、あの高校があるその地域性ってものが、そういうふうにさせているのか。あるいは学年制を加味したことはすばらしいとすれば、長野県下の多部制・単位制の高校には、広めていかなければいけないと考えましたが、「学年制を加味した」というのは、望月独特のものなのか、それがソフトとして、県下へ広めることができないのか。

それから3部制の3部(夜間部)のことについて最初の発言のときに、3部はどうなるのかという発言をさせていただきましたが、後の発言では、夜間定時制については現状のそのままでという発言があり、そういうことで望月を推奨されているのかと思いましたが、今度その「3部」については新しい展開になってきました。定時制夜間部はそこに置かない、夜間部はいままで通りであるということで果たしていいのか、と思っております。私は3部制にして今のようなことで、話を進めていけばいいと考えております。

(飯島委員長)

市川委員と原委員に質問がありますから、どうぞ。

(市川委員)

宮阪委員さんから、地域の周辺の理解ということをご指摘された、というようにご発言がありましたが、その通りだと思います。この件に関しましては、地域の理解協力、これは不可欠だと思います。ことに、これまで見てきた単位制高校、特に多部制をとっているところにつきましては、外部講師の状態を多くしているということ。才能教育法、才教育環境を目標としていること。地域の協力によって、外にも出て行こうとしていること、そういうようなことを考えたときに、地域の協力は欠かせないものだと思います。理解は必

要だと思います。

その点について、その望月の提案につきましては、いろいろな地域のご理解とサポートが得られた。これは県教委のサポート、人的あるいは金銭的あるいは施設を大幅に変えるということを考えると、これは通学の不便さを乗り越えて、子どもたちは来ると、そこに行くと、そういうふうに思いますね。

義務教育でしたならば、子どもひとりであっても、学校が存続していくわけです。ひとりでも面倒見ると、そういうことだと思います。しかしながら、これはほとんどもう義務教育化してしまっているの、高校教育に関しましては、ともすると忘れてしまうわけですが、上からのこの順番で、テスト点で輪切りにしていくというような、非常なこのことが繰り返して、それは定員があるから、このように行われているわけです。

定員があってもどこも同じ、どこも同じ特色のない学校で、しかもその点数で入れるか、入れないからというのは、そういうような判断基準だけでやっていった結果、そのシステムの、あるいは学年学級制で中学の現場では、本当にすき間なく一日中5分の余裕もなく、プログラムが開始される日もございます。そのように非常にシステムの不振な中で、やはりあふれてくる生徒たちが、必ずおるわけです。それはあらゆるレベルであります。

これは学力が低いからということではありません。あらゆるその上のレベルでも本当におって、自分の課題、いかに子どもたちが、一人ひとり満足できるかという環境を与えられるか、これはあらゆるレベルなわけですが、そういうことに関しまして、中学義務教育の卒業した上でも、高校教育のレベル、自分教育ですけれども、これは青年後期の社会に出て行く、青年後期に対する…。

（飯島委員長）

市川委員、小林委員からの「理念について、それは望月高校だけに関してのことか、それはその理念を生かしていけば、ほかのところでも、生かせることなのか」という質問だと思いますが。

（市川委員）

必要な、必要な理念を提供させてきて、提案させていただけるように思っております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。それでは学年制について。原委員お願いします。

（原 委員）

先ほど申し上げたことに尽きますが、もうひとつ具体的に申し上げますと、単位制のみの運営っていうのは、教科学習においては、これにもシステムのいろんな問題点がありますが、自分の好きな科目を選択して選んで、74単位で卒業するということになります。

そこでの問題点というのは、高校生活にとって、もうひとつ大きな軸が、教科学習のほかに、教科外の特活動活動といっていますが、それが非常に重要な意味を持つわけです。クラブをやる。生徒会をやる。あるいはホームルームでさまざまな交流をする。そのホームルームを、軸にするという構想がなされている。これが望月らしさだということを申し上げ

げて評価をしたい。こう申し上げたんです。

それから、多部制の理解にかかわることですが、多部制というのは、2部制でも多部制なのですね。3部制でも多部制であります。それはただし2部より3部のほうが、いろんな意味からいって、学校運営は難しい問題を、しょい込むことになる。従ってその2部制でスタートすることも、大いにあり得るってことだというように思います。

（飯島委員長）

学年制はほかで多部制・単位制を設けても、いわゆるこの通学区っていう意味じゃなくても、それはいいことであれば導入していったほうがいい、というお考えと受け取ってよろしいですか。はい。ありがとうございます。

（和泉委員）

私も、そろそろ考えを絞り込まなきゃいけない、という思いがあるのですから、ひとつひとつの項目についてチェックしているので、その利便性ということについて、意見を、重大な考えを述べたいと思います。

基本的には、望月さんとのプラットホームと教育というのがあるんですが、本当に捨てがたい。いい刺激を与えているし、ぜひ行きたいと思っているんですけど、利便性ということ考えたときに、先ほど宮阪さんがおっしゃったとおり、小海線か、それから、しなの鉄道の、やっぱり鉄道沿線っていう、この民間のバスの運営というのは、まあここにいらっしゃるかもしれませんが、経営状態によって、非常に本数が変わったり、いろんな過去の歴史の流れを見ている中で、必ずしも確保した状態でない。もしそれをクリアするのなら、もうスクールバスみたいなものしかない。いわゆる民営の中での確保というのは非常に、やっぱり、過去の中で見ていてもきつい、という思いがします。

ただ私はJR小海線沿線、しなの鉄道沿線で、確かに徒歩で何分というような形の時間軸は、これは地域として認めなきゃいけないですが、バスのインフラという面について、学校生活をやっていきますと、部活という問題もありますし、いろんな試験があったら時間がちょっとずれたりしたら、要するに、そこで努力をすれば学校で勉強するとかいろんな形がありますが、結果的にやっぱり、そういうインフラサポートは、希望としては理解できても、なかなかスムーズに対応できるという状態じゃないような気がします。そういう面で、利便性ということを考えていったときには、私は鉄道沿線のところに考えをまとめたと思っています。以上です。

（中沢委員）

交通利便性ということで、今、話が出ていますので、そのことについてですが、望月の場合に、確か鉄道はないので、あったほうが確かに利便性は上がると。これはもう誰でもが思っております。

ちょっと考え方を、発想を変えますとね、このまえ対案が出された中で、その山村留学的生徒を受け入れて、家族ぐるみの農業体験、逆に利便性がないからこそ、こういうことが可能だろうと思います。

多部制・単位制高校の中で、私が知っている範囲では、地域ぐるみでこういった受け入

れをしてやっていこうという発想は聞いたことがないです。だからこそこれが実現していけば、むしろ特色ある多部制・単位制高校になるというようなことだと思います。

確かに、生徒が通いやすさでいったならば、交通利便性も大事に考えますが、望月の場合、交通利便性における不安っていう要素はありますが、そこをカバーするものがこの山村留学的活動だと。そしてこの地域だけじゃなくもっと長野県全県下、あるいはもっと視野を広くして全国に、呼びかけて受け入れをする、そういった特色あるものが、私はここに見えるんです。で、これは県に頼るんじゃなくて地域がやる、例えば、NPO法人などですね。

具体的に言うと福島県ですが、ある地域がこの山村留学的发想で、村がバックアップしながら、まったく民間の人が全国から、小学生から中学生から高校生まで集めて、その地域の小学校、中学校、高校へ通っている。そういう場所があるんですね。これも約20年間続いています。そういうことを、私は見てきて、これは望月のことにつながると、私は思っていますね。あともちろん地域の努力は当然のことながら必要だとは思いますが。

(飯島委員長)

ありがとうございます。「存続」ということではそういうこともあるかと思います。

(佐藤副委員長)

どうも自分の出た学校の話ですので、なかなか話しにくいのですが、私は望月の今回の案は、本当に先ほどご説明ありましたように、東大の佐藤先生が指導され非常に盛り上がった、前回お聞きしただけでも、私は非常にいい案だなあと。こういうものがこれから多部制・単位制の中で、長野県らしい多部制・単位制の描く姿だなあ、と思っております。

それで私はそう思いながらも、かつ蓼科高校との統合の話を、あえてしたわけでございます。それは、いろいろな要素は頭の中にずっと入っています。利便性の問題。それから学生数がはたして確保できるのかとか、そういう問題はすべて発言の中にありまして、なおかつ、非常にいい案ですし、捨てがたい非常にいい案ですが、やっぱり将来を考えた場合に、やっぱり統合のほうがいいのではないかと、こんなふうに発言したわけでございます。

委員会の中で各委員が発言された案、改めてまた非常に望月の提案はいいなあ、というふうに思っているわけですが、これは学校運営の中で、今度考えてみますと、2学級を、最低どういう条件を加味しても、2学級が確保できない学校というのは、どのように考えていくのか。これはもうすでに方針が出されておりますね。2学級を切った場合どうなるのか。

ここが1番心配ですが、長野県でこれだけいい案が出て、今、山村留学の話も出て、そういうものを供えていこうという中で、場合によっては、魅力がいくらあってもほかの条件でその魅力が、本当に学級数を確保して、運営していける学校とはまた別の問題ですね。そういう中で、場合によっては、特殊な条件の生徒を育成するんだという中で、場合によっては2学級きってもというような話の中で、これが成り立つのであれば、私は今の案も賛成できます。ですが、やはりあまりこういうところで、特殊な条件をなかなか入れていくっていうのは難しいと思います。

そういう中で私は将来を考えれば、統合していくと。ただし統合する条件としては、先ほど申し上げた通りでございます。これはフィフティー・フィフティーの統合。両方の伝統をしっかり受け継いだ統合である。統廃合じゃなくて統合ですね。これをしっかり県教委のほうで、責任を持ってやっていただけるということになれば、私は、迷いつつもやはり統合のほうがいいのかなあ、とこんなふうに思っております。以上です。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。前回から引き続いて大変重い、ご意見をいただいております。ここで、あえて指名をさせていただきますが、立科町長の遠山委員、何かご発言が、あればいただきたいと思います。

（遠山委員）

いろいろな関係がありますので、発言は控えさせていただいております。

いずれにしても、望月高校にしても、蓼科高校にしても、自分の学校の名前を残したいです。そういう中で「両方統合してやれ」といっても、やはりそれぞれの町民が納得しないと思います。

多部制への移行で1校減らす分、やはり「苦渋の選択」と言うもので、本当に「望月高校」という名前を残して、立科としても「蓼科高校」という名前を残したい。それはそれだけの伝統と歴史があるからです。

私はこのような立場で委員会に参加しているため、発言は非常に難しい状況にあります。しかし、覚悟していた。これだけの皆さんの前で、また、これだけの傍聴に来ている人皆さんの気持ちが入っていますから、私は皆さんの意見をじっくりと聞いているところです。

これ以上は、申し訳ないが、コメントを控えさせていただきたいと思います。

（佐藤副委員長）

遠山委員さんの立場、非常に私もよくわかります。ですが、これは今回のこの改革っていうのは何10年に一遍行われる改革ですよ。ある所は完全になくなってしまう。そういう中で、それぞれの各地区の統合に対する反対といいますが、非常にデットロックにはまっているところですね。

私は遠山さんの今の発言は、私と全く違う立場ですから、納得しますけれども、私最初からいっているように、みんなが参画して学校改革をしよう、こういう今の現状ですよ。

その中で私は、地域エゴというのは絶対持ち込むべきではないと思います。我々委員は地域の代表ではないのです。その中で私は、遠山さんの立場は尊重しますけれども、やはり今統合され、どうして統合がこんなにみんなデットロックにはまっているかっていうこと考えてみますと、ひとつの学校は生き残って、ひとつの学校は消滅されちゃう。こういう発想があるからですよ。

これは何回もいうようですが、ふたつの学校が合わさって、どういう状況でも10年、20年たっても、びくともしない足腰のしっかりした高校ができるんだ、ということになれば、これは私は、納得される話じゃないかなあ、こう思います。以上です。

(飯島委員長)

はい、引き続きありがとうございます。前回、望月高校の代表の荻原氏が、統合案を見て、われわれの願いが現実、実現できそうもない感じ。現状のままでは存続が難しいから、多部制・単位制に転換していくのもひとつの方法として提案したいと、述べているんですけど。この辺のところが、大変今の佐藤委員の話と合わさって、大事なところだと思っております。

確かに、ひとつの高校がなくなっていくというのは、大変きつい話ではありますが、なんとか両方のいいところを残しながら統合していく、という形でいけないものかと、私自身、委員長としても考えております。それは今の少子化の中であって、両方の高校が存続する最善の方法のような、気がいたしております。「残るために統合する」ということだと、私は思っております。

実際人口が減ってきている中で、私たちはその辺の決断を、委員として考えていかなければいけないと思うわけであります。これは全員賛成ということが、なかなか難しいことであろうと思っています。

今、大変失礼だったんですが、遠山委員を指名してしまいました。答えられるはずがないだろうと思います。ほかにそういう委員さんは、たくさんいらっしゃると思うんです。けれども大きな意味で、高校をより良い型のものにしてに残し、地域の子どもたちが通えるような高校にして、残していくということの決断は、私たちに課せられたことではないのかと思います。

そんなところで、ここで本当は望月の多部制・単位制というのは、大変いい案ではありますが、提案された中で、素晴らしいところがたくさんあります。それはぜひ、合併、統合した中で生かしていったほしいと思っております。それは同じ地域ですから、生かされるだろうと、私は確信するのですが、この辺のところを、ご意見をいただきたいと思います。

(原 委員)

お願いします。前回に続いて望月のその対応について、交通の利便性というひとつの隘路があると、そのほかについては、それぞれ評価されているという、この事実を改めて確認をしたいと思うんです。いい案を出してもらったと、これはこれからの、特に地域教育プラットホームなどについては、高校あるいは中学いろんなところで考えていかなきゃいけない、そういう普遍性をもっているように感じています。

ところで今後の少子化傾向を考えていく上で、蓼科のこの悩みも視野に入れざるを得ない、ということもうたわないわけではないはずですが、少し古い話で恐縮ですが、こんなことをご紹介申し上げたいと思います。

現在の高校制度が昭和 23 年、1948 年に出来ました。この再編整備候補案という県教委の資料の中にも説明されていますが、そのときに実は、あの地域では、新しくできた望月高校と蓼科高校を合体をして、川西高校、川西総合高校にしようという構想がありました。これは、当時は新しい高校制度は、3 つの原則ということがうたわれていて、ひとつは男女共学であり、ひとつは学区制であり、そしてもうひとつは総合性ということが書かれています。

総合性は、普通教育と職業教育を合わせて施す。今の総合学科という発想の基になる考え方ですね。それを積極的にあの川西地区の皆さんは受け止めて、2つの学校を一緒にしたらどうか、こういう議論があります。これは望月の学校誌の中には、かなり詳しく記載されているところであります。

ところが結論からいうと、その後、総合高校構想は頓挫をします。それは最大の理由は、これをどういうふうに評価するかというのは、また難しいんですけども、地域エゴというに取られるかどうか。つまり望月も蓼科も「おらが地域を大事にしたい」、つまり地域づくりの核に高校を置きたい。こういうことであつたと思いますね。決してエゴイズムのぶつかり合いではなかったというふうに思うのです。

川西地区の中心としての自負があり、そしてこの地域をこれから発展させていく、そのためのそのためには高校が必要だ。若い青年たちの声が町の中にあふれていることが必要だ、とこういうことでありますね。本当に高校は、県立高校といっても、地域と共に歩んできた。そのことがその総合高校を逆に瓦解をさせ、単独でその後、数十年の歴史を堅持するということになっていきますね。

翻って同じようなことだと思うんです。望月が形を変えてのあの地に存続する、そこに若者たちが来る。そのことが今、望月町ではなくなりましたが、旧望月町域を励ますことになる。これがなくなったら望月はいっそう静かになっていく。ということだと思うんです。今、旧望月町域のみなさんが今日配られた資料にもありますが、大きな決意を持って運動に込めているのは、そこにあるわけですね。地域共にあるから。そういう学校を私はやはり支持したい、というふうに思うんです。

(太田委員)

おっしゃるとおりだと思います。多部制・単位制高校こそ、地域の皆さんと連携して学校づくりをしていかなくてはならないと思います。それは大賛成でございます。ただし前から申し上げていますが、一番は利便性が問われることになり、それは絶対条件であります。私は上田駅前のビルをお借りしたらどうかというような極端な例を申し上げておりますが、この学校はそういう利便性を追及していくべきではないかと考えており、今も意見は変えていません。

私は上田市在住ですが、地域エゴは差し控えなくてはならないとは思っていますが、やはり上田市のように人口が集中しているところにこの学校のお客様はたくさんいますので、成功の確率が高いわけで、そういうことから多部制・単位制高校は上小地区に設置すべきと考えております。もし、上田に置けないなら、坂城高校という事務局案になりますが、第一通学区での論議で坂城高校に決定するかは流動的というような話も伺っています。坂城高校に置けないなら、なおさら上田に設置をすべきではないかと考えます。

しかし、上田にどうしても置けないと言うなら、第二通学区としては佐久地区にという事務局案になるかもしれませんが、この辺のところは坂城高校のあり方によって方向が左右されると思っています。意見をだすようにとの委員長からの発言ですが、私としては今の時点では意見を出しようがない、もう少し経過をみきわめる時間をいただきたいと言わざるを得ないわけでございます。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。

1点先ほどの佐藤委員がいていたところで、最終答申の中にもあったと思いますが、1学年が2校とも、2学級以下になってきた場合、その辺のところは、どのように県教委は対応していくのか、例えば望月高校を存続的にすることに決定したときに、生徒が集まっていけば問題はないですが、減っていったときにどうするのか、県教委はどういう考えでいるのか。

例えば先ほど課長の話ですと、1学年3学級ということを押さえておいた、2学級それが2学級はもたなくて1学級になってきた、そのラインをどこに考えてどういう対応をこれから考えていくのか。ちょっとつまんだ質問で申し分けないですが、お願いできればと思います。

(吉江高校教育課長)

はい。1学年2学級っていうのは、基本的には多部制・単位制の場合には、部によって一応学科、クラス編成しなくてはいけないと思っていますので、そういう意味では、あまり問題にはならないと思っています。といいますのは、昼間と、極論をいいますと、昼間部2部だけでも2学級編成になりますので、そういう意味に合いです。

ただ先ほど懸念された点で、若干加えさせていただけるとすれば、私どもはやはり学校のいわゆる基本的な規模というのは、1学年1学級ではいけないというか、高等学校としてかなり厳しいと思っています。それを考えた場合に、全体のイメージとしますと、ある程度の規模を維持するため上に、ある程度の再編整備も必要だということで、ご提案しているということは、ご理解いただきたいと思います。

それから、さらに結果を申し上げますと、先ほど原委員さんのほうから、いわゆる戦後のお話が出ました。確かにそういうような動きの中で、いろいろ議論されていたのは、よく過去の計画とすれば承知している次第でございますが、ただ、しかしながらそれから先は、ずっといわゆる人口というのは増える時代であったと。少なくとも生徒数で言えば平成元年まで増えておりましたし、日本の人口で言えば、長野県の場合には2004年がいわゆるピークを過ぎる時期だった、というようなお話もございますが、そういうような時期を迎えているということの中で、ある意味違う意味の議論が必要なんだろうと考えている次第でございます。

(飯島委員長)

人口動態がその当時と違っているということであります。さて、お昼を過ぎて時間が、約束の1時半に近づいてきております。

先ほど議論の中で、太田委員の中からまいりました、年内慌てて何回やっても結論は、たぶん難しくなってきたような気がしてきたように、私自身も感じております。年を越して1度なり2度なりは、開催をお願いする形になってこようかと思っております。その辺も委員の皆さんにはご理解をいただきながら、今後の委員会のことに関しまして、事務局のほうでお願いしたいと思っております。

（植松主任教育支援主事）

それでは、12月の会議の予定につきましてお願いしたいと存じます。12月大変お忙しい時期でございますが、年内あと2回持てればというに考えておりまして、次回につきましては12月23日金曜日でございますが、午後に候補としたいと考えております。皆さま大変お忙しい日かと思いますが、12月28日水曜日でございますが、午前中を候補と考えたいと思っております。

（飯島委員長）

はい、事務局の原案であります。また十分副委員長とも相談し、当然この2回で終わるということにはならないと私は思っております。1月にまた1度なり2度なり、当然開く形になろうかと思えます。そしてまた今日も、望月の多部制・単位制を受け入れるか、受け入れないかという判断はここであえていたしません。それからそれにかかわって統合のことに関しても、結論を次回の委員会に移したいと思えます。

ただ、基本的に私たちが、検討事項として何を依頼されているかということ、もう1度お考えいただき、県教委から出ている資料、人口動態からなぜたたき台が出てきたのか、その辺のところをもう1回数字を追いながら、確認をして次回はお出いただくことを、お願いしたいと思います。

なお、重い資料ですが、本来はこの学校要覧も持っていただくと、どういう考えでいったらよいのかが、よくわかります。

それでは、今日は終わりたいと思えます。ありがとうございました。ご苦労さまでした。